

○やけたるちのは—  
野火にやけた茅のは

こまちがあね

時すぎてかれゆくをの、あさぎには今はおもひぞたえずもえける

○時すぎて—青葉の時をすぎて。戀の一さかりをすぎて

物おもひけるころ、ものへまかりけるみちに、野火のも

○おもひぞ—野火とおも火

伊 勢

冬がれの野べとわが身をおもひせばもえても春をまたまし物を

えけるをみてよめる

と も の り

水のあわのきえてうき身といひながら流れて猶もたのまる、哉

よみ人しらず

みなせ河ありてゆく水なくばこそつひにわが身をたえぬとおもはめ

み つ ね

吉野川よしや人こそつらからめはやくいひてしことはわすれじ

○ありて—なしといふに對して底には確にある水との心か  
○水なくば—底にも水がなく即ち内心に思ふところがなくば  
○わが身を—水尾をかける  
○早く—水流の早いことをかけていふ

よみ人しらず

世中の人の心は花ぞめのうつろひやすき色にぞ有りける

心こそうたてにくけれそめざらばうつろふこともをしからましや

こ ま ち

○そめざらば—思ひそめざらばの心

色みえでうつろふ物は世中の人のこゝろの花にぞありける

よみびとしらず

我のみや世をうぐひすとなきわびん人の心の花とちりなば

そせい法し

おもふともかれなむ人をいかゞせむあかずちりぬる花とこそみめ

よみ人しらず

いまはとて君がかれなばわがやどの花をばひとりみてやしのばむ

むねゆきのをん

○花を：みて—この花のごとしとさとつてあきらめる。昔は二人みたものをの心もあるか  
●あをん—宮内省本、静嘉堂文庫の頼阿本(小本)のまゝである



\*「わすれ草かれもやするとつれもなき人の心に霜はおかなむ

寛平御時、御屏風に哥か、せ給ひける時、よみてかきける  
そせい法し

わすれ草なにをかたねとおもひしはつれなき人の心なりけり

題しらず 兼元藝法師行

秋の田のいねてふこともかけなくになにをうしとか人のかるらん

きのつらゆき

はつ鴈のなきこそわたれ世中の人の心の秋しうければ

よみびとしらず

あはれともうしとも物をおもふ時などか涙のいとながるらむ

身をうしとおもふにきえぬ物なればかくてもへぬる世にこそ有りけれ

題シラズ 典侍藤原なほいこの朝臣 直子

\*「わすれ草かれもやするとつれもなき人の心に霜はおかなむ」の次に元永本は「わすれ草」がある。二三四頁を参照せよ。○いね——往ぬをかける。○かけなくに——詞にかけないのこまあ、稻を穂木にかけることからいふ。○かる——刈ると離る。○あはれともうしとも——あはれと思つてゐる上に更にうしと思つてゐる。感情が漸層的に高まるのをいふ。○いとながるらむ——いとまながるがれるのであらう。いとをいとまなくの略といふことの例は後撰に「春の池の玉もにあそぶにほ鳥の足のいとなき戀もするかな」とある。いとを感動詞にとつては調子がでない。

あまのかるもにすむ、しの我からとねをこそなかめ世をばうらみじ

いなば もとよの女

あひ見ぬもうきもわが身のから衣思ひしらずもとくるひもかな

寛平御時きさいの宮の哥合のうた すがの、たゞおむ 息臣

○つれなきを今はこひじとおもへども心よわくもおつるなみだか

題しらず 伊 勢

人しれずたえなましかばわびつ、もなき名ぞとだにいほまし物を

よみ人しらず

○それをだに思ふ事とてわがやどを見きとないひそ人のきかくに

あふことのもはらたえぬる時にこそ人の戀しきこともしりぬれ

わびはつる時さへ物のかなしきはいつこをしのぶなみだなるらむ

藤原おきかせ

○われから——藻などについでゐる虫。わが身の故からの心をよせる。○れをこそなかめ——なくことはなくがうらみはせぬ。○うきも——中が絶えてうくなる。○わが身のから衣——わが身からの意に唐衣をかける。○思ひしらずも——そのことわりを忘れて又あへるかと思つて。○つれなきを——中絶えてつれなくなつた人。○人しれず——吾々の戀が世間にはしれずにそれで絶えたのならば。○それをだに思ふ事とて——それ位のことて。さへはやもう、私の願ひとしてたのむからして下さるなと下の句の内容を指示する。實朝の歌に「それをだに願ふ事とてち早ぶる神の社にねがぬ日はなし」○きかく——きくの延



○かげならずして—  
かげならずしては

怨みてもなきてもいはむかたぞなき鏡ヒト清にみゆるかげならずして

讀人しらず

○わが身こそ浪—末  
の松山をこそ浪からい  
ふ  
○立ちかへり—浪の  
縁にて吳々もしみ  
の心を含める  
○うらみつる—浦を  
見るに怨みをかける  
○かへしても—終に  
は心かはりしても  
○はまのまさご—よ  
むともつきじに思ひよ  
せられた数は。これは  
数々忘れよとの意であ  
るわい

ゆふされば人なきとこをうちらはらひなげかむため三清となれるわが身か  
わたつみのわが身こそ浪立ちかへりあまのすむてふうらみつるかな  
あらをだをあらすき返し／＼ても人の心を見てこそやまめ  
有そうみのはまのまさごとたのめしはわするゝことのかずにぞありけ  
る

○たのみ—田の實を  
かける

○あしべより雲井をさしてゆく鴈のいやとほざかるわが身かなしも  
しぐれつゝもみづるよりもことのはの心の秋にあふぞわびしきかなしき元清  
秋風のふきとふきぬるむさしのはなべてくさばの色かはりけり木せいろまさりける元

小町

秋風にあふたのみこそかなしけれわが身むなしくなりぬとおもへば

平貞文

あき風のふきうらがへすくずのはのうらみても猶うらめしきかな

よみ人しらず

秋といへばよそにぞきゝしあだ人の我をふるせる名にこそ有りけれ  
わすらるゝ身をうぢばしのなかたえて人もかよはぬとしぞへにける

又はこなたかなたに人もかよはず

坂上これのり

あふことをは元ながらのはしのながらへてこひわたるまにとしぞへにける

とも のり

うきながらけぬるあわともなりなゝむながれてとだにたのまれぬ身は

よみ人しらず

○ながれてはいもせの山のなかにおつる吉野の河のよしや世中

○よそにぞきゝし—  
秋などといふことはよ  
そごとにきいてゐたが  
○身をうぢばし—身  
を憂きの心をかける  
○なかたえて—橋の  
縁語

○ながらへて—流れ  
てと長らへて  
○いもせの山—紀伊  
國那賀郡。夫婦の意を  
寄せる  
○なかにおつる—な  
かに川があつて夫婦の  
中を隔てる  
○よしや—まよよ。  
吉野、よし、世と「よ」  
の字をつゞけて用ふ



# 古今和歌集卷第十六

## 哀傷哥

いもうとの身まかりにける時よみける

小野のたかむらの朝臣

○なく涙雨とふら南わたり河水まさりなばかへりくるがに

さきのおほきおほいまうちぎみを、しらかはのあたりにお

くりける夜よめる 忠仁公 延喜之比太政大臣只二人也仍  
雖不詳前官下書也前後之由也 そせい法し

○ちの涙おちてぞたぎつ白河は君が世までのなにこそ有りけれ

ほりかはのおほきおほいまうちぎみ、身まかりにける時

に、ふかくさの山にをさめてけるのちによみける ナシ嘉

○わたり川——三途川  
○くるがに——来る爲  
に。歌賀に「路まがふがに」  
○忠仁公——良房  
○おくる——葬送  
○君が世までの——白河も今は赤くなつたら白河といふ名は君が世までのものである  
○堀河のおほきおほいまうちぎみ——太政大臣基經

僧 都 勝 延 正 通 照 元 清

○空蟬 の嘉 はからを見つゝもなぐさめつ深草の山煙だにたて

かむつけのみねを 孝雄

○深草の野 やま元 べのさくら も元 し心あらばことし許 ばかり はすみぞめにさけ

ふぢはらのとしゆきの朝臣の、身まかりにける時によみ

て、かの家につかはしける きのとものり

ねてもみゆねでもみえけりおほかたは空蟬の世ぞ夢には有りける

あひしれりける人の、身まかりにければよめる

きのつらゆき

夢とこそいふべかりけれ世中にうつゝある物と思ひけるかな

あひしれりける人の、身まかりにける時によめる

みぶのたぐみね

○ねてもみゆ——れれば勿論見える  
○ねてもみえけり——れなくともみえる。してみると、このまゝが夢か。見えるものは生死を包む夢幻境である  
○うつゝある物と思ひけるかな——あさはかにもうつゝがあるものと思つてゐたことかなあ

○空蟬はからを見つゝも——蟬はその殻を見て、現世はその殻をみて



ぬるがうちにみるをのみやは夢といはむはかなき世をもうつゝとはみ  
ず

あねの身まかりにける時によめる

せをせけばふちとなりてもよどみけりわかれをとむるしがらみぞなき

ふぢはらのたゞふさが、むかしあひしりて侍りける人の

身まかりにける時に、とぶらひにつかはすとてよめる

閑院

さきだゝぬくいのやちたびかなしきはながるゝ水のかへりこぬなり

きのともりのが身まかりにける時によめる

つらゆき

あすしらぬわが身とおもへどくれぬまのけふは人こそかなしかりけれ

たゞみね

●身まかりにける時に  
——静嘉堂文庫の頼阿  
本(小本)及び兼良本は  
「に」がない  
○くれぬまの云々——  
現に今感じてあるとこ  
ろを強くいつてある  
○人こそ——人の死が

○時しもあれや——時  
もあらうに、時も時と

て  
○あるをみる——生き  
てゐるのをみる

○おもひ——喪

○たもとなりけり——  
時雨にぬれるもみぢは  
わび人の袖のやうだ。

○ふぢ衣——喪服。既  
に註した(七七頁)

○はつるゝ——ほつれ  
る。この歌はあまりに  
形象化がすぎて悲みの  
情がでゝゐない

○あさつゆの——置く  
晩稻

○かりそめに——かり  
そめのものと苜をかけ  
る

○雲なれや——涙の源  
との心

時しもあれ秋やは人のわかるべきあるをみるだに戀しき物を

はゝがおもひにてよめる

凡河内みつね

神な月時雨にぬるゝもみぢばゝたゞわび人のたもとなりけり

ちゝがおもひにてよめる

たゞみね

ふぢ衣はつるゝいとわび人の涙の玉のをとぞなりける

おもひに侍りけるとしの秋、山てらへまかりけるみちに

てよめる

つらゆき

あさつゆのおくての山田かりそめにうき世のなかを思ひぬるかな

おもひに侍りける人をとぶらひにまかりてよめる

たゞみね

すみぞめの君がたもとは雲なれやたえず涙の雨とのみふる

女のおやおもひにて、山でらに侍りけるを、ある人の



とぶらひつかはせりければ、返事によめる

よみ人しらず

あしびきの山べに今はすみぞめの衣の袖のひる時き元もなし

諒闇のとし、池のほとりの花をみてよめる

たかむらの朝臣

○水のおもにしづく花の色さやかにも君がみかげのおもほゆるかな

深草のみかどの御國忌の日よめる 文屋のやすひで

○草ふかき霞の谷にかげかくしてる日のくれしけふにやはあらぬ

深草仁明のみかどの御時に、藏人頭にてよるひるなれつかう

まつりけるを、諒闇になりにつければ、さらに世にもまじ

らずして、ひえの山にのぼりてかしらおろしてけり、そ

の又のとしみな人、御ぶくぬぎであるはかうぶりたまは

○すみぞめ——住むと  
墨染

○しづく——水にうつる影が水中にあるが如く見える。これは物と水面との距離がある故である。水底の石は光の屈折によつて水中にあるが如く見え、これもしづく石といふ。○さやかにも——生前の御おみかげのはつきりと見えること。但し花といふのは天子の美しい御顔をいふ。○御國忌日——天皇崩御の間、喪服を脱ぐ。○かうぶりたまはり——位階を賜はる。

りなど、よろこびけるをきゝてよめる 僧 正 遍 昭 藏人頭 右近少將 良岑宗貞

○みな人は花の衣になりぬなり昔のたもとよかわきたにせよ

河原のおほいまうちぎみの、身まかりての秋、かの家の

ほとりをまかりけるに、もみぢの色まだふかくもならざ

りけるをみて、かの家によみていれたりける

近院寛平七年于時大納言左大將民部卿皇太子傳の右のおほいまうちぎみ 能有 文徳源氏

うちつけにさびしくもあるかもみぢばもぬしなきやどは色なかりけり

ふぢはらのたかつねの朝臣の、身まかりての又のとしの

なつ、ほとゝぎすのなきけるをきゝてよめる

つ ら ゆ き

ほとゝぎすけさなくこゑにおどろけば君にわかれし時にぞ有りける

さくらをうゑてありけるに、やうやく花さきぬべき時に

○うちつけに——急に感情のたかまるのをいふ

○花の衣——喪服に對して、平常の花やかな衣  
○昔のたもと——隠者の服  
○河原のおほいまうちぎみ——河原左大臣源融、嵯峨天皇の皇子

○おどろけば——外界の刺戟に對して異常に感動するのをいふ



かのうゑける人、身まかりにければ、その花をみてよめる  
る

きのもちゆき茂行

花よりも人こそあだになりにつれいづれをさきにこひんとかみし  
あるじ身まかりにける人の家の、梅の花をみてよめる

つらゆき

色もかも昔ながらに元のこさに、ほへどもうゑけむ人のかげぞ戀しき

河原の左のおほいまうちぎみの、身まかりてののち、かの  
家にまかりてありけるに、しほがまといふ所のさまをつ  
くれりけるをみてよめる

貫元之

きみまさで煙たえにし、ほがまのうらさびしくもみえわたるかな

藤原利基 高藤公兄のとしもとの朝臣の右近中将にてすみ侍りけるさう

しの、みまかりてのち人もすまずなりにけるに秋の夜ふ

○人こそあだに—花  
はあだなるものであるが  
○いづれをさきと—  
花が散つて戀ひるのと  
人が死んで戀ひるのと

○昔のこさ—昔の濃  
さ

○うらさびしく—浦  
をかける

○みえわたる—舟に  
て渡るのをかける

○さうし—曹司。出  
仕する部屋

○ことならば—こと  
ならばさかはずはあらぬ  
(三五頁)を見よ

○なき人のやど云々—  
へば時鳥を冥途の鳥とい  
の宿に通ひ行かば人の意  
詞にも心にもかいて人を  
○れのみ—郭公に因  
○んでいふ—  
雲の立つほどの野原 白

けて物よりまうできけるついでに見いれければ、もとあ  
りしせんざいもいとしげくあれたりけるを見て、はやく  
そこにすみ侍りければ、むかしを思ひやりてよみける

みはるのありすけ御春有助

君がうゑしひとむらす、き虫のねのしげき野べともなりにける哉

これたかのみこの、ちの侍りけむ時によめりけむうた  
どもと、こひければ、かきておくりけるおくによみてか  
けりける

とも のり

ことならばことのはさへもきえな、むみれば涙のたぎまさりけり

題しらず

よみ人しらず

なき人のやどにかよは、郭公かけてねにのみなくとつげなむ  
たれみよと花さきぬ元さけるらむ白雲のたつのはやくなりにし物を



○式部卿のみこ——宇  
多帝の皇子  
○帳のかたびら——御  
帳臺に懸ける帳の布帛  
○むかしのて——故人  
の筆

式部卿のみこ、閑院の五のみこにすみわたりけるを、い  
くばくもあらで女みこの身まかりにける時に、かのみこ  
すみける帳のかたびらのひもに、元清ふみをゆひつれたりけ  
るをとりて見れば、むかしのてにてこのうたをなむかき  
つれたりける

○かづくに——くれ  
も。なにつけて

○かづくに我をわすれぬ物ならば山の霞をあはれとはみよ  
をとこの、人のくにまかれりけるまに、女にはかにや  
まひをして、いとよわくなりける時、よみおきて身ま  
かりにける  
よみ人しらず

○こゑをだにきかで——  
夫に見守られないで  
○たま——たましひ  
○君ぞかなしき——こ  
の「かなし」は深い愛  
の心を含んでゐる

こゑをだにきかでわかるゝたまよりもなきとこにねむ君ぞかなしき  
やまひにわづらひ侍りける秋、こゝちのたのもしげなく  
おぼえければ、よみて人のもとにつかはしける

大江千里

もみぢ葉を風にまかせてみるよりもはかなき物はいのちなりけり

身まかりなむとてよめる

藤原これもと

露をなどあだなる物とおもひけむわが身も草におかぬ許を

やまひしてよわくなりける時よめる なりひらの朝臣

○つひにゆくみちとはかねてき、しかど昨日けふとはおもはざりしを

かひのくに、あひしりて侍りける人とぶらはむとて、

まかりけるを、みちなかにてにはかにやまひをして、い

ま／＼となりにつければ、よみて京にもてまかりて、は

にみせよといひて、人につけ侍りけるうた

ありはらのしげはる

かりそめのゆきかひぢとぞ思ひこし今はかぎりのかどでなりけり

●わ——或る物に「わ  
ふ」といふのを見た母  
を今日の如く發音しな  
かつた時代があつたの  
をすることができ  
○ゆきかひぢ——往反  
の道に、甲斐路を寄せ  
る



古今和歌集卷第十七

雑哥上

題しらず

よみ人しらず

わがうへに露ぞおくなるあまの河とわたる舟のかいのしづくか

○おもふどちまどみせる夜は唐錦たまくをしき物にぞ有りける

うれしきをなにつまむ唐衣たもとゆたかにたてといはましを

限りなき君がためにとをる花は時しもわかぬ物にぞありける

ある人のいはく、この哥はさきのおほいまうちぎみのなり

○紫のひともとゆるにむさしの草はみながらあはれとぞみる

○露ぞおくなる雨露の恵の意  
○たまくしき物を立  
たつことの惜しさを立  
派な唐錦をむざくと  
立ちきる惜しさに借り  
ていふ。たつは或は座  
を立つとも「まく」は  
「ん」の延  
○たもとゆたかに  
袂をひろく裁て  
○時しもわかぬ  
時の別なき  
○紫のひともとゆるに  
紫草が一本あるた  
めに  
○みなながら  
○この歌から紫のゆか  
りといはれてゐる

○めのおとうと妻の妹  
○もて侍りける妻  
にもつてをる  
○うへのきぬ袍

○むらさきの色こきと  
きは自分の妻を愛  
する時は右の歌によ  
つていふ

○わかれざりける  
わけへだてなく妻の愛  
をうつす

○宰相参議の唐名  
○そめぬうへのきぬの  
あや  
の綾絹

○色なしとみにく  
しつれない

○いそのかみのなむま  
つ氏。石上並松の物部  
まつる

○やぶしわかれば  
戴原まで分け隔てなし  
に照すから石の上は  
ふるといふので古いと  
ころを敷にたとへたの  
である

○色なしと人やみるらむ昔よりふかき心にそめてし物を

いそのかみのなむまつが、宮づかへもせで、いそのかみ

といふ所にこもり侍りけるを、にはかにかうぶりたまは

れりければ、よろこびいひつかはすとて、よみてつかは

しける

ふるのいまみち

日の光やぶしわかねばいその神ふりにしさとに花もさきけり



兵衛府生ヨリ左近將監ニマカリワタリテ、トネリドモニ

サケタビケルツイデニヨメル 忠 岑

\*カシハギノ森ノワタリヲウチスギテ三笠ノ山ニワレハキニケリ

二條のきさきの、まだ東宮のみやすん所と申しける時に

おほはらのにまうで給ひける日よめる なりひらの朝臣

おほはらやをしほの山もけふこそは神世のことも思ひいづらめ

五節のまひゝめをみてよめる よしみねのむねさだ

百あまつかぜ雲のかよひびふきとぢよをとめのすがたしぼしとゞめむ

五節のあしたに、かむざしのたまのおちたりけるを見て

たがならんと、とぶらひてよめる

河原の左のおほいまうちぎみ

ぬしやたれとへど白玉いはなくにさらばなべてやあはれと思はむ

\*この一首元永本にある  
○カシハギ 兵衛、衛門の異名  
○三笠ノ山 近衛の大少將の異名

○をしほの山 大原野の神の鎮座まします

○神世のこと 藤原氏の祖神天兒屋命が天孫の尊を補佐した昔の契をさす

○雲のかよひち 五節の舞姫を天女と看做し、その天上に歸るべき通路を喩へていふ

○白玉 知らぬをかむかつていふ

○なべてやあはれと思はたれだらうか、その主をなつかしく思はうとするがわからぬは、舞姫のすべてをあはれと思はう

○うへのさぶらひ 殿上の侍所。禁中にある侍臣の控所  
○きさいの宮 藤原温子。太政大臣基經の女  
○おほみきのおろし 大御酒の残り  
○くら人の 後の御方の女藏人

○たまだれの 玉垂の緒から「をがめ」にかける。こがめとなつても同じやうに用ふ  
○こがめ 小瓶に小龜をかける  
○いづら 瓶はかへつてこなめたかとの心はどこにてたかとの心にかける  
○こよろぎのいそ 相摸國中郡。たゞ「いそ」といふため  
○おき 置をかける  
○おきもの 姿かたのわけるいのみて笑ふ  
○方たがへ 出發し  
○方とす 方向は先づ  
○神が 神は先づ  
○他家と 自家の住居に  
○天の 又自分のときも出てとまる

寛平御時に、うへのさぶらひに侍りけるをのことも、かめをもたせて、きさいの宮の御かたに、おほみきのおろしときこえにたてまつりたりけるを、くら人もわらひて、かめをおまへにもていで、ともかくもいはずなりにければ、つかひのかへりきてさなむありつるといひければ、くら人のなかにおくりける としゆきの朝臣  
○たまだれのこがめやいづらこよろぎのいそのなみわけおきにいでにけり

女どものみてわらひければよめる けむげいほうしかたちこそみ山がくれのくち木なれ心は花になさばなりなむ方たがへに、人の家にまかれりける時に、あるじのきぬをさせたりけるを、あしたにかへすとてよみける



きのとものり  
蟬のはよるの衣はうすけれどうつりがこくもにほひぬるかな

題しらず

よみ人しらず

おそくいづる月にもあるかな足引の山のあなたをしむべらなり

○わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月をみて

なりひらの朝臣

○おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの

月おもしろしとて、凡河内躬恒がまうできたりけるによ

める

きのつらゆき

かつみれどうとくもあるかな月影のいたらぬさともあらじと思へば

池に月のみえけるをよめる

ふたつなき物と思ひしをみなそこに山のはならでいづる月かげ

○うすけれど——うすくて貧弱ではあるが  
○うつりがこく——芳心はこもつてゐる。實際にたきしめの香もあつたものか

○わが心云々——この歌は單なる主観歌であつて傳説は直接の關係がない

○おほかたは——並天抵のことでは。輕卒には

○いたらぬさともあらじとおもへば——獨占せれば満足せぬ心。一つの抒情である

○雲のみを——天河といふのによつて水尾は雲からなつてゐるようが雲のたちゐるは早いものなればこのみをはさも早いであらう  
○ひかりとどめず——光を下界にさすひまもなく  
○山もと——西の、山の麓  
○田むらのみかど——文徳天皇  
左の頭註は原本にあるまゝである

慧子代始齋院  
天安元年二月  
廢之其事秘世  
莫知云々若先  
是又有此事歟  
遂被廢云々元  
慶元年正月六  
日薨以通子爲  
齋院母同惟高  
二年而退  
○藤別子——系圖には則子

題しらず

よみ人しらず

あまのかは雲のみをにてはやければひかりとどめず月ぞながるゝ

あかずして月のかくるゝ山もとはあなたおもてぞ戀しかりける

これたかのみこの、かりしけるともにかかりて、やどりに

にかへりて、よひとよさけをのみ、物がたりをしけるに

十一日の月もかくれなむとしけるをりに、みこゑひてう

ちへいりなむとしければよみ侍りける なりひらの朝臣

○あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげていれずもあらなん

田むらのみかどの御時に、齋院に侍りけるあきらけいこ

のみこを、は、あやまちありといひて、齋院をかへられ

むとしけるを、そのことやみにければよめる

あま 敬信







り

○なごぞか——山城國  
乙訓郡

なりひらの朝臣のは伊豆内親王 桓武皇女 貞觀三年九月薨のみこ、ながをかなにすみ侍りける  
時に、なりひら宮づかへすとて、時ともえまかりとぶら  
はず侍りければ、しはすばかりに、はなのみこのもとよ  
り、とみのことコトとてふみをもてまうできたり、あけてみ  
れば、ことばコトなくトて、ありけるうた

○おいぬればさらぬわかれもありといへばいよと見まくほしき君かな  
返し なりひらの朝臣

世中にさらぬわかれのなくもがなちよもととなげく人のこのため

寛平御時きさいの宮の哥合のうた ありはらのむねやな

白雪のやへふりしけるかへる山かへるニカサナルもおいにけるかな

おなじ御時のうへのさぶらひにて、をのこどもにおほみき

○さらぬわかれ——去  
りがたいわかれ。死別

○白雪——白髪を含め  
ていふ

○かへるくも——返  
すくも。ほんにく

○あそび——普通に管  
弦のこと。詩歌管弦の  
こともいふ

○せめきけむ——責め  
來けむ。聞ぎけむとの  
説もある

○今日に——今日の結  
構なお遊びに

○ちはやぶる——橋姫  
は神であるのでかくい  
ふ

○なれをしぞ——船を  
しぞ、旅をしぞの類

○梓弓——射るに聯想  
して磯にかける

たまひて、おほみあそびありけるついでに、つかうまつ  
れる としゆきのおそむ

おいぬとてなどかわが身をせめにきけむおいにずばけふにあはまし物か  
題しらず よみ人しらず

ちはやぶるうぢのはしヒメりなれをしぞかあはれとは思ふとしのへぬれ  
ば

我みてもひさしくなりぬすみすみのえの岸の姫松いくよへぬらむ  
住吉の岸のひめ松人ならばいくよかへしはとはまし物を

梓弓いそべのこ松たが世にかよろづよかねてたねをまきけん  
このふたうたはある人のいはく、かきのもとの人まろが也  
かくしつゝ世をやつくさむ高砂のをのへにたてる松ならなくに

藤原おきかせ



○松も——松は古いが

古今和歌集卷第十七

一九六

百たれをかもしる人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに

よみ人しらず

○わたつ海のおきつ塩あひに——この歌は述懐の歌である

○わたつ海のおきつ塩あひにうかぶあわのきえぬ物からよる方もなしく元講

○わたつみのかざしにさせる——このわたつみは海神

わたつうみのかざしにさせる白妙の浪もてゆへるあはぢしま山は元

○ゆへる——ゆひめぐらしてゐる

なにはがたしほみちくらしあま衣たみの、しまにたづなきわたる

○あまごろも——雨からたみの、裳にかける

つらゆきがいづみのくに、侍りける時に、やまとよりこ

えまうできて、よみてつかはしける 藤原たゞふさ

きみをおもひおきつのはまになくたづのたづねくればぞありとだにきく元

る元

返し

つらゆき

おきつなみたかしのつ元はまの濱松のなにこそ君をまちわたりつれけ元

○おきつのはまになくたづの——尋ねを誘ひ出すためであるが和泉は海の國であるので因んでいふ

○ありとだにきく——あるといふことだけである。或はありやなしやの如く解釋すべきものか

○たかし——波が高いをうけてゐる。和泉國泉北郡

○かりそめの——苜を

なにはにまかれりける時よめる

○あまとぞ……なる——海の氣分にひたることを誇張していふ

なにはがたおふる玉もをかりそめのに元あまとぞ我はなりぬべらなる

○すみよし——住み良しの心かける

あひしれりける人の、すみよしら講にまうでけるによみてつかはしける

○すみよしとあまはいふ元つぐともながわすな人忘草おふといふなり

みぶのたゞみね

○雨により——雨がふるので

雨によりたみの、しま一本にきたれどもをけふゆけどなにはかくれぬ物にぞ有りける

○なにはかくれぬ——蓑といふ名に隠れることはできぬ。難波をきかせてある

法皇、にしかはにおはしましたりける日、つるすにたてりといふことを、だいにてよませたまひける

○にしかは——山城大堰川。御幸は延喜七年九月

あしたづのたてる河邊を吹く風によせてかへらぬなみかとぞみる

○中務のみこ——宇多天皇皇子

中務のみこの家の池に、舟をつくりて、おろしはじめて

○中務のみこ——宇多天皇皇子

中務のみこの家の池に、舟をつくりて、おろしはじめて

○中務のみこ——宇多天皇皇子

中務のみこの家の池に、舟をつくりて、おろしはじめて

○中務のみこ——宇多天皇皇子

中務のみこの家の池に、舟をつくりて、おろしはじめて

○中務のみこ——宇多天皇皇子

中務のみこの家の池に、舟をつくりて、おろしはじめて



あそびける日、上元法皇御覽じにおはしましたりけり、ゆふ  
さりつかた、かへりおはしまさむとしけるをりに、よみ  
てたてまつりける 伊 勢

水のうへにうかべる舟の君ならばこゝぞとまりといはまし物を  
からことゝいふ所にてよめる 眞せい法し

宮こまでひゞきかよへるからことは浪のをすげて風ぞひきける  
ぬのひきのたきにてよめる 在原行平朝臣

○こきちらすたきの白玉ひろひおきて世のうき時の涙にぞかる  
オナシ清布引のたきのもとにて、人々あつまりて哥よみける時に  
よめる なりひらの朝臣

ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせばきに  
よしのゝたきをみてよめる 承均法師

○からことゝ備前。  
物名のところに出てゐ  
た

たがためにひきてさらせるぬのなれやよをへてみれどとる人もなき なし元清

題しらず 神たい法し

きよたきのせづのしらいとくりためて山わけ衣おりてきまましを  
龍門にまうでゝ、たきのもとにてよめる 伊 勢

たちぬはぬきぬきし人もなき物をなに山姫のぬのさらすらん  
朱雀院のみかど、ぬのひきのたき御覽ぜむとて、ふむ月 御とら元

のなぬかの日おはしましてありける時に、さぶらふ人々  
に哥よませ給ひけるによめる ち姫 たちばなのながもり

ぬしなくてさらせるぬのをたなばたにわが心とやけふはかさまし  
ひえの山なる、おとはのたきをみてよめる

たゞみね

○きよ瀧——山城國高  
雄山の麓の清瀧川  
○山わけ衣——山をゆ  
く時の衣。清淨である  
べき山わけ衣を清い瀧  
の白糸にて縫ふとの心  
○龍門——リウモン。  
大和國吉野郡の龍門寺

○たちぬはぬきぬきし  
人——仙人をいふ。無  
縫の天衣をきた人との  
心  
○朱雀院のみかど——  
宇多上皇

○ぬしなくて——主が  
ないから無斷でかりて  
織女に借せよう  
○たなばたに——七月  
七日に因んでいふ



○くろきすぢなし—  
瀧の水を白髪に喩へて  
いふ

○白雲—瀧を雲に見  
たてゝいふ

おちたぎつたきる元のみなかみとしつもりおいにけらしなくろきすぢなし

おなじたきをよめる み つ ね

風ふけど所は元清イもさらぬ白雲はよをへておつる水た元にぞ有りける

田むらの御時に、女ノカノ清ばうのさむらひにて、御屏風のゑ御

覽じけるに、たきおちたりける所のありけるを元。おもしろし、これを題

にて哥よめと、さぶらふ人におほせられければよめる

三條の町惟高の母

思ひせく心のうちのたきなれやおつとはみれどおとのきも元こえぬ

屏風のゑなる花をよめる つ ら ゆ き

さきそめし時よりのちはうちはへて世は春なれやいろのつねなる

屏風のゑによみあはせてかきける 坂上これのり

かりてほす山田のいねのこきたれてなきこそわたれ秋のうければ

○思ひせく—思ひに  
せきこむ  
○うちはへて—うち  
のばして  
○いろのつねなる—  
屏風の繪なればいふ  
○かりてほす—雁を  
かける  
○こきたれて—十三  
卷に—あけぬとて歸る  
道にはこきたれてと  
あつた。たゞ垂れると  
意。こぎたれの心とも  
見えるがほすいねはま  
だこがない

### 古今和歌集卷第十八

#### 雑哥下

題しらず

読人しらず

○世中も高はなにかつねなるあすかは元は昨日のふちぞけふも高はせになる

いく世しもあらしわが身をは元なぞもかくあまのかるもに思ひみだるも高、

鴈ノ清のくる峯の朝霧はれずのみおもひつきせぬ世中のうさ

小野たかむらの朝臣

しかりとてそむかれなくにことしあればまづなげかれぬも元高あなう世中

かひのかみに侍りける時、京へまかりのぼりける人につ

かはしける をのゝさだき

○あすか—は—大和  
國高市郡  
○あまのかるもに—  
あまの刈りあげた藻が  
亂れ勝ちであるのを假  
つていふ。述懐である  
○はれずのみ—朝霧  
のはれないのを假つて  
思ひのはれないのをい  
ふ  
○しかりとて—それ  
かというて  
○ことしあれば—か  
くの如くあれば



○はねぬ山が高ければ雲はつれにかかつてゐるとの心

宮こ人いかにと、はゞ山たかみはれぬ雲井にわぶとこたへよ

○せう—丞(ハシヨウ)の意か。ぞうは屬の音便か。何れも三等官をいふ。こゝは參河の掾になつたのである

文屋のやすひでがみかほのせうになりて、あがたみには

○あがたみ—縣見。田舎見物

えいでたゝじやといひやれりける返事によめる

○やれりける—詞書はやすひてを主としていひ、作者名は第三

小野 小町

○身をうき草にける身

○わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ

○根をたへては露を重絶えて

あはれてふことこそうたて世中を思ひはなれぬほだしなりけれ

○あはれてふこと

あはれてふことの葉ごとにおくつゆは昔をこふる涙なりけり

○あはれてふこと

あはれてふことこの葉ごとにおくつゆは昔をこふる涙なりけり

○あはれてふこと

あはれてふことこの葉ごとにおくつゆは昔をこふる涙なりけり

○あはれてふこと

あはれてふことこの葉ごとにおくつゆは昔をこふる涙なりけり

○ありてなければ—非空非有の心をいつたのであらう

○よのなかは夢かうつゝかうつゝともゆめともしらずありてなければ

○いづら—「あり」にのみにかゝる

世中にいづらわが身のありてなしあはれとやいはむあなうとやいはん  
山里は物のさびしきことこそあれ世のうきよりはすみよかりけり  
これたかのみこ

白雲のたえずたなびく峯にだにすめばすみぬる世にこそ有りけれ

ふるのいまみち

しりにけむきゝてもいとへ世中は浪のさわぎに風ぞしくめる

そ せ い

いづくにか世をばいとほむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ

よみ人しらず

世中は昔よりやはうかりけむわが身ひとつのためになれるか

世中をいとふ山べの草木とやあなうの花の色にいでにけん

みよしのゝ山のあなたにやどもがな世のうき時のかくれがにせむ

○浪のさわぎに風ぞしくめる—浪風のあら

○昔よりやは—昔よりはうくあるだらうか



○かけみち  
道とも陰

○あるかひ  
うけく

○雪やけなま  
し行きを  
かける

\*この一首元  
永本にある

○我カラ  
自分故。虫の  
名をかける

○竹の子の  
子供に比し

○うきふし  
竹の節を憂  
き(折り)節に  
かける

世にふればうさこそまされみよしの、いはのかげみちふみならしてん三清

いかならんいはほのなかにすまばか毛清高は世のうきことサルベキ清のきこえこざらむ

足引の山のまにくかくれなむうき世中はあるかひもなし

世中のうけくにあきぬおく山のこのはにふれる雪やけなまし

おなじもじなきうた

沖ツ浪ウチヨスルモニイホリシテユクヘサダメヌ我カラゾコハ

ものゝべのよしな

世のうきめみえぬ山ぢへいらんにはおもふ人こそほだしなりけれ

山のほうしのもとへつかはしける 凡河内みつね

世をすて、山にいる人山にても猶うき時はいづちゆくらむ

物思ひける時、いとサ清なきこをみてよめる

○今更になにおひ元いづらん竹の子のうきふし、げき世とは元しらずや

んすせもひましみめゆさるてえこふけまやくおのあうむらなれつそれたよかあをるぬりちとへ性にはろい  
9 11 1652318221 17 30 191 6 284 3292323 82725 1024157 20141231 13  
15 1921 2765 4 7323230109 182 3 1423 2431261 829112212251617 13

題しらず

よみ人しらず

世にふればことの葉しげきくれ竹のうきふしごとに元鶯ぞなく

木にもあらず草にもあらぬ竹のよの元はしにわが身はなりぬべらなり

ある人のいはく、たかつのみこの哥也高津内親王 桓武女

わが身からうき世中とな元づけつ、人のためさへかなしがるらむ

おきのくに、ながされて侍りける時によめる

たかむらの朝臣

思ひきやひなのわかれにおとろへてあまのなはたきいさりせんとは

田むらの御時に、事にあたりて、つのくにのすまといふ

所にこもり侍りけるに、宮のうちに侍りける人につかは

しける 在原行平朝臣

○わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつ、わぶとこたへよ

\*この一首元永本にな  
い  
○世にふればよは  
竹の縁語  
○ことのは言の葉  
がしげくてうるさい  
人事が多くてうるさい  
葉の繁いのを竹にかる  
○うきふし憂きふ  
し(折)をかける  
○鶯竹の縁  
○竹のよ節と節と  
の問をよといひ、それ  
に世をかける  
○はしはしくれ者  
の意  
○ひなのわかれひ  
なにわかれてきて  
○なはたき繩を手  
繰りて。タクルともタ  
グルともいふ  
○事にあたりて勅  
勘を蒙つて  
○わくらばにたま  
さかに  
○もしほたれつ浦  
の縁にてしほたれて  
はしをたるか。し折れ  
の意



○將監——少將の次で將曹の上。六以上

○あまびこの——ぼんやりとしてゐるところにおとづれをうけて正氣になつたとの心

○いでがてにする——社會に出るのをしづりがちにす。出世し難い心をふくめていふ

○東宮——醍醐天皇の皇子保明親王

○このもとごに——木の本ごと。このもかのもとあるかげごとの意  
○春のみ山——春宮の心かける。春はみ山もしげるの意もある  
○時なりける人——時めいた人

左近將監少將元とけて侍りける時に、女のとぶらひにおこせたりける返事に、よみてつかはしける　をのゝはるかぜ

○あまびこのおとづれしとぞ今は思ふ我か人かと身をたどる世にやま元

人の國へまかりなむといひたぢけるを、あやのせちにとめはべりければ、とどなりて。(元)

つかさとけて侍りける時よめる

平さだふむ

うき世にはかどさせりともみえなくになどかわが身のいでがてにするありはてぬ命まつまの程タニモ 清高ばかりうきことしげくおもはずもがな

みこの宮のたちはきに侍りけるを、宮づかへつかうまつ東 清

らずとて、とけて侍りける時によめる　みやぢのきよき清樹

つくばねのこのもとごとこのまかのまに 元高にたちぞよる春のみやまのかげを戀ひつ、

時なりける人の、にはかに時なくなりてなげくを見て、

みづからのなげきもなく、よろこびもなきことを思ひて

よめる

清原深養父

○ひかりなき谷には春もよそなればさきてとくちる物思ひもなし

かつら家清に侍りける時に、七條中宮の 清のとはせ給へりける御

返事にたてまつりける　伊 勢

久方のなかにおひたるさとなればひかりをのみぞたのむべらなる

きヨ清のとしさだが阿波のすけかみ元にまかりける時に、むまのは

なむけせむとて、けふといひおくれりける時に、こゝかナシ 嘉

しこにまかりありきて、夜ふくるまでみえざりければつ

かはしける　なりひらの朝臣

今ぞしるくるしき物と人またむさとをばかれずとふべかりけり

これたかのみこのもとに、まかりかよひけるを、かしら

おろして、をのといふ所に侍りけるに、正月にとぶらは

○くるしき物と——これにて句  
○人またむさとをば——されば私も、人を思つてゐるところは疏にせずによくくとはればならぬ

○さきてとくちる——一時はさかえてもすぐにちるの意  
○かつら——山城國葛野郡  
○七條中宮——宇多天皇の中宮。基經女温子  
○久方のなかにおひたる——桂の里。こゝでは久方が直ちに空の義となる  
○ひかりをのみぞ——中宮を光にたとへる  
○けふといひおくれりける時——出發は今日だといふのでおくらうとした時  
○くるしき物と——これにて句  
○人またむさとをば——されば私も、人を思つてゐるところは疏にせずによくくとはればならぬ



○つれづれとして  
みこの様子をいふか。  
然るときは「物がなし  
く」作者の主観となる。  
或はその場面が「つれづ  
れさうに見えたのか

○野とならば——清輔  
本に「或本ニフルノイ  
マミチガ哥」  
○かりにだにやは君は  
こざらん——かりにも  
こないであらうか。き  
てくれるであらう。狩  
の心をかけていふ  
○我を君なにはの浦  
——我をあなたが、なん  
とも思はないを難波に  
かける  
○うきめをみつ——浮  
海草を憂き目に、見つ  
を御津にかける  
○あま——尼と海人

むとてまかりたりけるに、ひえの山のふもととなりければ  
雪いとふかたか元かりけり、しひてかのむろにまかりいたりて  
をがみけるに、つれづれとしていと物がなしくて、かへ  
りまうできて、よみておくりける  
○わすれては夢かと思ふおもひきや雪ふみわけて君をみむとは  
つ、元清高  
深草のさとにすみ侍りて、京へまうでくとて、そこなり  
ける人によみておくりける  
としをへてすみこしさとをいで、いなばいと深草のとやなりなむ  
返し  
よみ人しらず

野とならばうづらとなきて年なりてなきをらむ元はへむかりにだにやは君はこざらん  
題しらず

○我を君は元なにはの浦ソ清にありしかばうきめをみつのあまとなりにき

この哥はある人、むかしをとこありけるをうなの、を  
とことはずなりにければ、なにはなるみつのてらにま  
かりて、あまになりて、よみてをとこにつかはせりけ  
るとなむいへる

返し

なにはがたうらむべきまもおもほえずいづこをみつのあまとかはなるなるらむ元

題シラズ元清高 讀人不知清

今更にとふべき人もおもほえずやへむぐらしてかどさせりてへ  
ともだちの、ひさしうまうでこざりけるもとによみてつ  
かはしける  
み つ ね

水のおもにおふるさ月のうき草のうきことあれやねをたえてこぬ  
人をとほで、ひさしうありけるをりに、あひうらみけれ

○なにはがた——うら  
むにかける  
○うらむべきまもおも  
ほえず——怨の心が起  
きるほど日敷も關係し  
てゐたやうに思はれな  
い  
○いづこをみつの——  
どこを見てうらんだの  
か  
○とふべき人もおもほ  
えず——訪うて下さる  
人があるとも思はれな  
い  
○て——といへ  
○あひうらみければ——  
お互にうらみをいひ  
あふ



ばよめる

同 人

身をすて、ゆきやしにけんおもふよりほかなる物は心なりけり

むねをかのおほよりが、こしよりまうできたりける時に

雪のふりけるをみて、おのがおもひはこの雪のごとくな

むつもれるといひけるをりによめる

君がおもひ雪とつもらばたのまれず春よりのちはあちじとおもへば

返し

宗 岳 大 頼

きみをのみおもひこしぢの白山はいつかは雪のきゆる時ある

こしなりける人につかはしける

おもひやるこしのしら山しらねどもひとよも夢にこえぬよぞなき

題しらす

讀人しらす

いざこゝにわが世はへなむすが原や伏見のさとのあれまくもをし

○ゆきやしにけん—  
心が身をすて、行つた  
のであらうか  
○おもふよりほかなる  
—思ふ通りにならぬ  
—心身が一致共同しな  
いと心

○おもひこし—思ひ  
來しに越路をかける

○いつかは—ある  
反語。この皮肉は平凡  
である

○こえぬよぞなき—  
夢の内にて、かなたに  
行かない夜はない。山  
に因んで越えるといふ

○こゝに—伏見をさ  
す

○菅原や—地名。も  
とは菅の生えてゐる原

○伏見—大和國添下  
の義か  
意郡。菅原の内の伏見の

○みわ—大國郡城上  
郡

○宮このたつみ—都  
からたつみ(東南)の方  
角にある  
○しるかぞすむ—この  
やうに平氣ですんでゐ  
るのに人は世を憂ぢ山  
といふ  
○いよの—幾世を  
へた

○みるなべに—わび  
人が住んでゐる宿かな  
と合點がいたかと思ふ  
と。感情の随伴して起  
るのをいふ  
○なげきは—  
自ら心を傷ませる。く  
はへるは調子がわるい  
○人ふるすさと—京  
都にをれば自分を戀の  
果にふるすさとしてしま  
ふので、そこをすて、ま  
旅に出たが奈良の都が  
傷ついた心には痛まし  
い感じを與へるので古  
里といふ語にたどつて  
やつばしこゝもふくる  
のさける、あゝ物憂いと  
心

○わがいははみわの山もとこひしくばとぶらひきませすぎたてるかど

きせむほうし

百わがいほは宮このたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり

よみ人しらす

あれにけりあはれいくよのやどなれやすみけむ人のおとづれもせぬ

ならへまかりける時に、あれたる家に、女の琴ひきける

をき、て、よみていれたりける

わび人のすむべきやど、みるなべになげきくは、ることのねぞする

はつせにまうづるみちに、ならの京にやどれりける時よ

める

二

條

人ふるすさをいとひてこしかどもならのみやこもうき名なりけり

題しらす

よみ人しらす



○いづれかさしてわがならむ—どこを名ざして行けばわがおちつところであらう  
○ゆくへしらねば—どこにも行くところがなから、しかたなくこゝにわびつゝもすむ  
○ちりのみは—ちりは連用名詞

○ごうちける人—任肪述異記に晋王質伐木。至信安郡石室山。見數童子圍碁。與質一物。如棗核。食之不飢。局未終。斧柯爛盡。既歸無復時人

世中はいづれかさしてわがならむゆきとまるをぞやどゝさだむる  
相坂こゝ元の嵐のかぜはさむけれどゆくへしらねばわびつゝぞぬるふ元清高

○風のうへにありかさだめぬちりの身はゆくへもしらずなりぬべらなり  
家をうりてよめる  
伊 勢

あすかがはふちにもあらぬわがやどもせにかはりゆく物にぞありける  
つくしに侍りける時に、まかりかよひてこゝ嘉家、ごうちける人  
のもとに、京にかへりまうできてつかはしける  
きのともりの

ふるさとは見しごともあるはずをのゝえのくちし所ぞ戀しかりける  
女ともだちと物ナシ嘉家がたりしてわかれてのちにつかはしける  
み ち の く こゝ清高  
ほが女

○あかざりし袖のなかにやいりにけんわがたましひのなき心ちする

○もろこしのはう官—遣唐使の判官。三等官

○なよ竹—しの竹  
○なよ竹の—竹のよ(節と節との間)を夜にかける  
○おきゐて—霜の置くのを起きて居てにかける  
○風ふけばおきつ白浪—白浪がたつを立田山にかけ浪につけて風をそへる。白浪は盗人が出て恐しい山といふ説もあるが、歌としてはふさはしくない。たゞ立田山は険しい故そこを夜中に一人で越えるのを思ひやつたものと見てよい

寛平御時に、もろこしのはう官にめされて侍りける時に  
東宮殿上元のさぶらひにて、をのこどもさけたうべけるついで  
によみ侍りける  
ふぢはらのたゞふさ

なよ竹の夜ながさうへにはつ霜のおきゐて物を思ふ比こゝかな  
題しらず  
よみ人しらず

○風ふけばおきつ白浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらん  
ある人、このうたは昔やまとのくになりける人のむすめに、ある人すみわたりけり、この女おやもなくなりて、家もわろくなりゆくあひだに、このをとこかふちのくに、人をあひしりてかよひつゝ、かれやうにのみなりゆきけり、さりけれどもつらげなるけしきもみえでかふちへいくごとに、をとこの心のごとくにしつゝ、



○こと心——異心

○たがみそぎゆふつけ  
鳥に放つゆふつけ鳥で  
あるだらうか？よくも  
なくことかなの心。ゆ  
ふつけ鳥は四境祭に限  
らないといふ  
○唐衣——たつた山に  
かける  
\*この一首元永本にて  
は十五卷の一わすれ草  
二頁の次に重複して  
ある  
○ゆくへもしらぬあと  
をとどむる——はかな  
いあとを止めてゐるが  
人に忘れられたときこ  
の様であらう。行くへ  
もしらぬは千鳥の行く  
方もなしであるが、遠  
方へ行き去ること、あ  
とは浪に消されることが  
などは全體として見れ  
ばはかなしである

古今和歌集卷第十八

二二四

いだしやりければあやしと思ひて、もしなきまにこと  
心もやあると、うたがひて、月のおもしろかりける夜  
かふちへいくまねにて、ユキせんざいのなにかくれて見  
ければ、夜ふくるまでイニことをかきならしつゝ、うちな  
げきてこの哥をよみてねにければ、これをきいてはそれ  
より又ほかへもまからずなりにけりとなむ、いひつた  
へたる

題シラズ

ヨミ人シラズ

たがみそぎゆふつけ鳥か唐衣たつたの山にをりはへてなく  
\*わすれん時しのべとぞはヤまちどりゆくへもしらぬあとをとどむる  
貞観御時、萬葉集はいつばかりつくれるぞと、とはせた  
まひければよみてたてまつりける 文屋ありする

○神な月時雨ふりおけるならの葉のなにおふ宮サトのふるごとぞこれハ

寛平御時、哥たてまつりけるついでにたてまつりける

大江千里

あしたづのひとりおくれでなくころは雲のうへまできこえつがなん

題シラズ

ふぢはらのかちおむ

人しれずおもふ心は春霞たちいで、ナシ君がめにもみえなむ

哥めしける時に、たてまつるとてよみておくにかきつけ

伊勢

○山河ミツのおとにのみきくも、じきを身をはやながらみるよしもがな

○山河の——おとにか  
ける  
○もゝじもを——直ち  
に宮中をさす  
○身をはやながら——  
身のまゝで。伊勢は昔  
宇多天皇の御息所であ  
つたのでかくいふ。み  
をはやは水脈速をかけ  
る

雑歌下

二二五







○あまびこの——おと  
 にかける  
 ○あまびこの……おも  
 ひみだれて……春歌  
 ○さみだれの……たれ  
 もれざめて……夏歌  
 ○からにしき……見て  
 しのぶ……秋歌  
 ○神な月……猶きえか  
 り……冬歌  
 ○ふる雪の猶きえかり  
 としかへる年はあら玉の  
 ○時につけつ……四  
 季の景物につけつ  
 ○ことをいひつ……  
 片一方では  
 ○世の人の——人間性  
 をもつた人。以下戀歌  
 ○あかずして——上下  
 にかゝる。下は離別と  
 驛旅  
 ○ふぢごろもおれる心  
 も——哀傷  
 ○やちぐさのことは  
 ごとくに——雑、物名、  
 雑體などをいふ  
 ○いせの海の浦のしほ  
 がひ……を拾ひあ  
 つめるが如くに  
 ○たまののにかけるはか  
 なく短いのにかける  
 ○おもひあへず——任  
 じに堪へぬ

あまびこの 々元 おとはの山の 元 はるがすみ おもひみだれて  
 さみだれの 元 空もとぶろに 元 さよふけて 山ほとゝぎす  
 なくごとし 元 たれもねざめて 元 からにしき たつたの山の  
 もみぢ葉を 元 見てのみしのぶ 元 神な月 元 しぐれノて  
 冬の夜の 元 庭もはだれに 元 みる雪の 元 猶きえかへり  
 としごとに 元 時につけつ、 元 あはれてふ 元 ことをいひつ、  
 きみをのみ 元 ちよにといはふ 元 世の人の 元 おもひするがの  
 ふじのねの 元 もゆるおもひも 元 あかずして 元 わかるゝなみだ  
 ふぢごろも 元 おれる心 元 やちぐさの 元 ことのはごとに  
 すべらぎの 元 おほせかしこみ 元 まきくの 元 中につくすと  
 いせの海の 元 浦のしほがひ 元 ひろひあつめ 元 とれりとすれど  
 たまののを 元 みじかき心 元 おもひあへず猶あらたまの

○かへり見もせぬ——  
 一生懸命にやつたとの  
 心。禹が九國の水を治  
 めて門を過ぎて我家  
 に入らなかつた故事に  
 よるか  
 ●たてまつりける——  
 宮内省本のまゝである  
 静嘉堂文庫本は「たて  
 まつれる」

○世々のふるごとなか  
 りせば——先例がなか  
 つたら  
 ○のばへ——のべの延  
 ○身はしもながら——  
 人丸は下官でありなが  
 ら  
 ○ちりにつけとや——  
 古の迹を繼げとや  
 \* \* この二句流布本に  
 ある。宮内省本、静嘉  
 堂文庫本、清輔本、嘉  
 祿本等にはない

としをへて の中元 大宮にのみ 元 ひさかたの 元 ひるよるわかず  
 つかふとて 元 かへり見もせぬ 元 わがやどの 元 しのぶ草おふる  
 いたまあらみ 元 ふる春雨の 元 もりやしぬらん 元  
 ふるうたにくはへてたてまつりけるながうた 元  
 壬 生 忠 岑  
 くれたけの 元 世々のふるごと 元 なかりせば 元 いかほのぬまの  
 いかにして 元 おもふこゝろを 元 のばへまし 元 あはれむかしべ  
 ありきてふ 元 人まるこそは 元 うれしけれ 元 身はしもながら  
 ことの葉を 元 あまつ空まで 元 きこえあげ 元 すゑの世までの  
 あとゝなし 元 今もおほせの 元 くだれるは 元 ちりにつけとや  
 ちりの身に 元 つもれることを 元 とはるらむ 元 これをおもへば  
 いにしへも 元 くすりけがせる 元 けだものゝ 元 雲にほえけむ



○いにしへにくすりけ  
 がせる。神傳に時  
 人傳。八公。安。臨去  
 時。餘。置在中庭。  
 雞。啄。之。盡。得。昇。天。  
 故。雞。鳴。上。犬。吠。雲。中。  
 安。是。淮南。王。劉。安。中。  
 藥。飲。之。天。昇。本。の  
 「かいなん」は淮南か。  
 こゝに引いた心は人後  
 業に携つて非常に悦ぶ  
 心か。のなさけもおも  
 ほへず。あまりのう  
 れしさに。無精  
 にうれしい。天子  
 ○ちかきまもり。忠  
 岑はもと左近の番長で  
 あつた。秋  
 は西からくるかた。秋  
 後。右衛門府生。忠岑は  
 た。右衛門は左衛門に  
 對して西にある。九重より  
 外。をさくしくもおも  
 はれず。はかしくし  
 くおもはれない。し  
 六の三十のむつ。五  
 ○やよければ。大層  
 多ければ

こゝちして ちゞのなさけも おもほえず ひとつ心ぞ  
 ほこらしき かくはあれども てるひかり ちかきまもりの  
 身なりしを たれかは秋の くるかたに あざむきいで、  
ナシ 元 清 ナシ 元 清 ナシ 元 清 る 葦  
 みかきより とのへもる身の みかきもり  
 おもほえず こゝのかさねの なかにては あらしの風も  
ふ 元 ナシ 元 清 ナシ 元 清 る 葦  
 きかざりき 今のは山し ちかければ 春はかすみに  
 たなびかれ 夏はうつせみ なきくらし 秋は時雨に  
なす 元 清 ナシ 元 清 ナシ 元 清 る 葦  
 袖をかし 冬は霜にぞ せめらるゝ かゝるわびしき  
 身ながらに つもれるとしを しるせれば いつゝのむつに  
 なりにけり これにそはれる セ 清 わたくしの おいのかずさへ  
せめ くれ ば 元 ナシ 元 清 な 今 元  
 やよければ 身はいやくて としたかき ことくるしさ  
 かくしつゝ ながらのはしの ながらへて なにはの浦に

○おぼほれむ。溺れ  
 る。波といふのに囚ん  
 でいふ

○おいずしなずのくす  
 り。蓬萊山上の果實  
 をいふ  
 ○わかえつゝ。若え  
 つゝ。一説に我が得つ  
 づ。君が八千代にあや  
 かるの意

○こがくれたりと  
 この様に結構な御代が  
 かくれてゐたと

●はつしぐれ。静嘉  
 堂文庫の頓阿本(大本)  
 は「うちしぐれ」  
 ○もみちとゝもに  
 もみちと共に時雨が降  
 る。古里  
 ○むらく。まだら  
 に

たつなみの た 元 なみのしわにや おぼれむ さすがにいのち  
 をしければ れ ば 元 こしのくになる しら山の かしらはしるく  
 なりぬとも な 元 おとはのたきの な 今 元 おとにきく おいずしなずの  
 くすりもが か 元 君がやちよを わかえつゝみむ も 元

タノノ哥

君が世に逢坂山のいはし水こがくれたりとおもひけるかな

冬のながうた

凡河内躬恒

ちはやぶる 神な月とや けさよりは くもりもあへず  
う ち ナシ 元 清 ナシ 元 清 ナシ 元 清  
 はつしぐれ もみちとゝもに ふるさとの よしのゝ山の  
オ 口 清 一 ナシ 元 清 ナシ 元 清 ナシ 元 清  
 山あらしも さむく日ごとに なりゆけば たまのをとけて  
ト 清 ナシ 元 清 ナシ 元 清 ナシ 元 清  
 こきちらし あられみだれて しもこほり いやかたまれる  
 にはのおもに むらく見ゆる 冬草の うへにふりしく



しらゆきの つもりく<sup>レ</sup>て あらたまの としを<sup>も</sup>あまたも<sup>元</sup>  
すぐしつるかな

七條のきさきさきうせたまひにけるのちによみける

延喜七年六月八日崩三十六

伊勢

おきつなみ	あれのみまさる	みやのうち <sup>に元</sup> は	としへてすみし
伊勢のあまも	舟ながしたる	心ちして	よらむ方なく
かなしきに	涙の色の	くれなるは	われらがなかの
時雨にて	秋 <sup>*</sup> のみぢと	ひとく <sup>*</sup> は	おのがちりく <sup>*</sup>
わかれなば	たのむか <sup>に</sup> げなく <sup>清</sup>	なりはて、	とまる物とは
花すゝき	君なき庭に	むれたちて	空をまねかば
はつかりの	なきわたりつゝ	よそにこそみめ	

○おきつなみ——あれ  
るにかける  
○あれのみまさる——  
宮の失せ給うたために  
いふ  
○としへてすみし伊勢  
のあまも——長い間海  
になれてゐた海人も。  
伊勢はこの宮に仕へて  
ゐたことがある。伊勢  
の海はわが名をかけて  
いふ。  
\*\*\*\*この四句宮内省  
本に缺けてゐる  
○花すゝき——作者の  
心をうつしていふ  
○はつかりの——僅か  
に初雁のみが

旋頭哥

題しらず

讀人しらず

うちわたすをちかた人にも  
のまをすわれそのそこにしろくさ  
けるはなにの花ぞも

返し

春されば野べにまづさくみれどあかぬ花<sup>に元</sup>まひなしにた<sup>に</sup>な<sup>に</sup>  
るべき花のなれや

題しらず

はつせ河ふるかはのべにふたもとあるすぎとしをへてまたも  
あひみむふたもとあるすぎ

つらゆき

○旋頭歌——セドウカ  
普通には五七七、五七  
七である。五七七とよ  
んで更に五  
七七と上に  
かへるので

五七七  
五七七

旋頭といひ相似形をつ  
くるので雙本ともいふ  
稀には五七五七七、  
五七五七七もある  
○うちわたす——遠い  
所を見渡していふ語  
○ものまをすわれ——  
われ物申す  
○まひなしに——まひ  
なひなしに  
○この花は梅をいふ

●ハツカゼハ——ハツ  
セガハの順序をおきか  
へるとハツカゼハにな  
る



●さす——ます——さをまの一態に誤寫し、更に「ま」とかいてしまつたものか

君がさすみかさの山のもみぢばの色神な月時雨の雨のそめるむらなりけり

\*この一首元永本にある

躬 恒

マスカッミソコナルカゲニムカヒキテミル時ニコソシラヌオ  
キナニアフ心地スレ

誹諧哥

題しらず

讀人しらず

○むめの花見にこそきつれ鶯のひとくくといとひしもをる

素性法師

山吹の花いろ衣ぬしやたれとへどこたへずくちなしにして

○誹諧——誹は俳にて戲の義。歌の調子は一般にまじめなものであるがそれに對してユーマーのあるものをいふ  
○ひとくく——なき聲にこのやうな音があるとの心  
○いとふ——人を恐れてぬし——その主の意か  
○くちなし——口無し山吹のきぬをそめる山梔子をかける

藤原敏行朝臣

○いくばくの田をつくればか郭公しでのたをさをあさなくよぶ  
七月六日たなばたのこゝろをよみける

藤原かねすけの朝臣

いつしかとまたく心きをはぎにあげてあまの河原をけふやわた覽

凡河内みつね

むつごともまだつきなくにあけぬにけりめりいづらは秋のながしてふよは

僧正へんぜう

秋のゝになまめきたてる女郎花あなかしがことごとしまし花もひと時

よみ人しらず

秋くれば野べにたはるゝをみなへしいづれの人かつまですけみるべき

あき霧のはれてくもれば女郎花はなのすがたの元ぞみえかくれする

○つまで——花を摘まてに抓までをよせる。人の身をつねつて思ひを知らせるのである

○しでのたをさ——郭公の異名とも鳴く聲の擬聲ともいふ。賤の田長をかけるのであらう  
○あさなくよぶ——田をつくるについて田長をよんで命をうけるとの心  
○またく——いそぎまたれる心。跨ぐにかけ  
○今日——七日を待たず六日に  
○いづらは——どこかどこに。この歌は調子の上に俳諧味がある







題しらず

よみ人しらず

おもへども猶うとまれぬ春霞かゝらぬ山のあらじとおもへば

平貞文

春の野のしげき草ばのつま戀にとびたつきじのほろゝとぞなく

きのよしひと

秋のゝつまなき鹿のとしをへてなぞわが戀のかひよとぞなく

みつね

せみのはのひとへにうすき夏衣なればよりなむ物にやはあらぬ

たゞみね

かくれぬのしたよりおふるねぬなはのねぬなはたてじくるないとひそ

題シラズ

よみ人しらず

ことならばおもはずとやはいひはてぬなぞ世中のたまだすきなる

○ほろゝと雉子のな  
くねにほろゝと涙の出  
るさまをかける  
○なぞわが戀のかひよ  
とぞなく  
我が戀に甲斐があるよ  
とて問妻がないのか  
ないか  
かひよの鹿  
のなき聲  
○うすき  
今は情が  
うすい心とも衣はう  
すければよれくにな  
り易いとの心とも  
○なればよりなむ  
着慣ればよれくにな  
るを寄るにかけより  
つきはつれなく見えて  
みてもなれるうちに情  
がわくとの心  
○れぬなは  
沼に生えて繩の如き故  
この名がある  
○くる  
繩はくるも  
の故に來るにかけひ  
○おもはずとやはいひ  
ばてぬ  
思つてくれ  
ないか  
ひきつてくれ  
○たまだすきなる  
世中にひつかかつてゐ  
るとの心

○おもはずとのみいふ  
なれば——これほどに  
思つてゐるのに認めて  
くれないならば  
○おほぬさにして——  
ひくてがあまたあると  
の心

○おもひけむ人——我  
を思つてくれた人  
○ともにおもはまし——  
—そのときこちらから  
も思つてやればよかつ  
たのに  
○はなもひぬかな——  
くさめは悪兆なれば思  
ひたつたことを中止す  
るといふ  
○あく——厭くに灰汁  
をかける。灰汁で洗へ  
ばどんな色もあせる

おもふてふ人の心のくまごとにしたちかくれつゝみるよしもがな

○思へどもおもはずとのみいふなればいなやおもはじおもふかひなし

我をのみおもふといはゞあるべきをいでや心はおほぬさにして

われを思ふ人をおもはぬむくいにやわが思ふ人の我をおもはぬ

「一本 つかやぶ

おもひけむ人をぞともにおもはましまさしやむくいなかりけりやは

題シラズ

「一本 よみ人しらず

○いで、ゆかむ人をとゞめむよしなきにとなりの方にはなもひぬかな

○紅にそめし心もたのまれず人をあくにはうつるてふなり

清原深養父

いとほるゝわが身は春のこまなれやのがひがてらにはなちすてつる

鶯のこぞのやどりのふるすとや我には人のつれなかるらむ



さかしらに夏は人まねさゝのはのさやぐ霜よをわがひとりぬる

平 中 興

あふことのいまははつかになりぬれば夜ふかゝらでは月なかりけり

左のおほいまうちぎみ

もろこしのよしの、山にこもるともおくれんとおもふ我ならなくに

な が き

雲はれぬあさまの山のあさましや人の心をみてこそやまめ

伊 勢

なにはなるながらのはしもつくるなり今はわが身をなに、たとへん

よみ人しらず

まめなれどなにそはよけくかるかやのみだれてあれどあしけくもなし

お き か ぜ

○夏は人まねしを  
してひとりぬをした。夏  
は暑いからといふ口實  
もあつたがきて冬にな  
つて  
○はつか—僅かの意  
のはつかに廿日をかけ  
る  
○月—たより、つて  
をかける  
○おくれん—しりご  
みをしないで、後を追  
つて出てくる

○あさまの山—あさ  
ましやにかける外に雲  
のかゝつてよく見えぬ  
のたへる  
○人の心を—わしの  
心をよくみてからのこ  
とにしてくれ  
○つくらなり—新し  
くつくられてしまつた  
ら、さて今度は何につ  
とへようか。一説につ  
くらは盡きてなくなつ  
たから、ないものにな  
くなることをたとへる  
わけにはゆかぬ  
○まめ—まじめ  
よけく、あしけく—  
よし、あしの延

○いとこなりけるを  
こによそへて—従兄  
が戀をしてゐるとつく  
りたので、からかはれ  
げたので、解しての歌で  
ある  
○よそながら—いと  
こなら直接うちあけて  
もよいの—いと  
こに糸をかける—いと  
こいへば—いふのは  
○いへば—針をか  
ける  
○すく—好く。又は  
過ぐ。糸に因んですげ  
る、すくふなどの一つ  
をかける  
○ねぎごと—ねがひ  
ごと  
○なげき—木につい  
て杜といふ  
○つらづる—なげい  
て物思ふときのさま  
なげきの木から杖を聯  
想していふ  
○かひなく—映なく  
甲斐なく—逢ふ期に  
○あふご—逢ふ期に  
物を荷ふ木の枒をかけ  
る  
○わかれて—三月月  
片割れなるごとく我が  
胸もわかれて

なにかその名のたつことをしからむしりてまどふは我ひとりかは

いとこなりけるをとこによそへて人のいひければ

そ

よそながらわが身にいとよるといへばたゞいつはりにすく許なり

題しらず

○ねぎごとをさのみき、けむ社こそはてはなげきのもりとなるらめ

題不知

なげきこる山としたかくなりぬればつらづるのみぞまづ、かれける

題不知

なげきをばこりのみつみて足引の山のかひなくなりぬべらなり

人こふることをおもにとになひもてあふごなきこそわびしかりけれ

よひのまにいで、いりぬるみか月のわかれて物思ふころにもあるかな



○そへにとて——それがよからうといつて  
○かくすれば——この次に語が省かれてゐる

○世中は——擬人化していふ

○年のおもはむ——年を擬人化していふ  
○心さへに——蓋し心までもさへに心許り  
○はふる——捨てる。  
或は葬るか  
\*清輔本はこの歌以下がなくて十九巻を終つてゐる。一方に元永本は巻末に三首を増すことと思ふ。この巻は編輯上に動搖があつたことをしる事ができる

○み——賞をかける  
○すきもの——酸きものに好色者をつける

○法皇——宇多法皇

○わびしらに——まじらの音を通して  
○かひ——峽に甲斐をかける

○うつぶし——かりねのことをいふ。伏しに五倍子をつける

\*\*\*この三首元永本にある

そへにとてとすればかゝりかくすればあないひしらずあふさきるさに  
世中のうきたびごとに身をなげば深き谷こそあさくなりなめ

在原元方

よのなかはいかにくるしとおもふらんこゝらの人にうらみらるれば

よみ人しらず

なにをして身のいたづらにおいぬらん年のおもはむことぞやさしき

おきかぜ

身はすてつ心をさへにはふらさじつひにはいかゞなるとしるべく

ちざと

白雲のともにはわが身はふりぬれど心はきえぬ物にぞ有りける

よみびとしらず

梅花さきてのちの身なればやすき物とのみ人のいふらん

題しらず

法皇にしかはにおはしましたりける日、さる山のかひに

さけぶといふことを題にてよませたまうける

みつね

わびしらにましらなゝきそ足引の山のかひあるけふにやはあらぬ

題しらず

よみ人しらず

世をいとひこのもとごとにてたちよりてうつぶしそめのあさのきぬなり

人ノ牛ヲツカヒケルガ、死ニケレバソノ牛ノヌシノモト

源宗岳娘

ワガノリシ事ヲウシトヤオモヒケム草葉ニカ、ル露ノイノチヲ

ヨミ人シラズ

イカニシテコレヲカクサムクレナキノヤシホノ衣マクリデニシテ

躬恒

テル月ヲ弓張トシモイフコトハマノ葉サシテイレバナリケリ

誹諧哥











○きみをおきてあだし心をわがもたばすゑの松山浪もこしてん元こえなん

さがみうた

○こよろぎのいそたちならしいそなつむめざしぬらすなおきにをれなみ  
ひたちうた

○つくばねのこのもかのもにかげはあれど君がみかげにますかげはなし  
つくばねの峯のツのみぢばおちつツもりしるもしらぬもなべてかなしも

かひうた

○かひがねをさやにもみしがカヒがナシけナシれなくよこほりコふせるさやのなか山コ  
かひがねをねこし山こし吹くかぜを人にもがもやことつてやらんコ  
伊勢うたコ

伊勢うた

○をふの浦にかたえさしおほひなるなしのなりもならずもねてかたらは  
む

○磯に立つてふみならし  
○いそなふみならし  
○濱なともいふ海草の事  
○その髪を切つて目を刺  
○沖にをれ沖に居  
○れ又は沖に折れてをれ  
\*この一首俊成本にな  
い  
○しるもしらぬもなべ  
てかなしも知るも  
知らぬもすべ愛するも  
紅葉はどの木からおち  
たとはしらないが無差  
別に愛を感じるが如き  
との心  
○けれ心。コロ  
○ケケレと訛音した  
のである  
○れこしみれをこ  
○かたえさしおほひ  
○片枝差し覆ひ夜の  
衣をうちかはすさまに  
いふ  
○なりもならずも  
戀が終までうまくな  
うとなるまいと、とに

○冬の賀茂のまつり恒例  
月とす賀祭は四月十一日  
宇多天皇が未だ王侍従  
と申され御夢に白髪  
老人が出た祭が白髪  
つたほし今の身分はあ  
つた及ぶところでは力  
のお答へになつた然と  
にお急仁になつた八月  
六日太子御即位はこれ  
つたのである敏行はこれ  
の時東遊歌を詠じた

冬の賀茂のまつりのうた

藤原敏行朝臣

ちはやぶるかもまつり元のやしろのひめまて元こ松よろづ世ふとも色はかはらじ



家々稱證本之本乍書入以墨滅哥 今別書之

卷第十 物名部

ひぐらし

つらゆき

そま人は宮木ひぐらし足引の山の山びこよびとよむなり

在郭公下 空蟬上

勝 臣

かけりてもなにをかたまのきてもみむからはほのほとなりにし物を

をがたまの木 友則下

くれのおも

つらゆき

こし時と戀ひつゝをればゆふぐれのおもかげにのみみえわたる哉

忍草 利貞下

おきのゐ みやこしま

をのゝこまち

○かけりても——走つてかへつても。一度死んだ人の魂が再びこの土にかけりかへつても  
○たま——魂  
○から——骸

○おき——熾にもえる火

○ゐて——我身の上にあて。据ゑて

○宮こしまべの——京と島べとに

○そめどの——染殿。もと良房の家であつたが、のち清和天皇の外宮となつた

○あはた——粟田

○あはたつ——淡立つと粟田

おきのゐて身をやくよりもかなしきは宮こしまべのわかれなりけり

からこと 清行下

そめどの あはた

あやもち

うきめをばよそめとのみぞのがれゆく雲のあはたつ山のふもとに

このうたは水ナシののみかどの、そめどのよりあはたへ

うつりたまうける時によめる

桂宮下

卷第十一

奥山のすがのねしのぎふる雪下

けふ人をこふる心は大井河ながるゝ水におとらざりけり

わざもこに相坂山のしのすゝきはにはいでも戀ひわたる哉

卷第十三

○相坂山——逢うても……の心



○いぬかみのとこの山  
近江國犬上川床の山  
●なとり河——流布本にはいさや河とあつていさにかゝる。元永本はいさら川。なとり河にてはつゞかない

戀ひしくばしたにをおもへむらさきの下

いぬかみのとこの山なるなとり河いさとこたへよわがなもらすな

此の哥ある人の、ナシあめのみかどのあふみのうねめにたまへると

返し

うねめのたてまつれる

山しなのおとはのたきのおとにだに人のしるべくわがこひめやも

卷第十四

おもふてふことの葉のみや秋をへて下

そとほりひめの、ひとりゐてみかどをこひたてまつりて

○わがせこがくべきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも

深養父、戀しとはたがなづけゝむことならん下

つらゆき

みちしらばつみにもゆかむすみのかのきしにあふてふこひわすれ草

古今和歌集序

紀 淑 望

\*この名は筋切にはない

○逸——よろこぶの意  
○風雅頌はその性質上の分類にて風は地方の詩、雅は朝廷の詩、頌は祭の詩である  
○賦は作詩上の分類にて賦は平叙、比は外物を借る間接表現、興は本義と外物とを並叙するものである  
○天神之孫——彦火々出見尊を云ふ  
○海童之女——豊玉姫を云ふ  
○二方の間にヒコナギサタケウガヤフキアハセズノミコトが生れる。姫はみことを生んで直ちに海に歸るの尊の御歌にオキツドリカモツク

夫和歌者。託其根於心地。發其華於詞林者也。人之在世。

不能無爲。思慮易遷。哀樂相變。感生於志。詠形於言。是以。

逸者其聲樂。怨者其吟悲。可以述懷。可以發憤。動天地。感。

鬼神。化人倫。和夫婦。莫宜於和歌。和歌有六義。一曰風。二。

曰賦。三曰比。四曰興。五曰雅。六曰頌。若夫春鷲之轉花中。

秋蟬之吟樹上。雖無曲折。各發哥謠。物皆有之。自然之理。

也。然而神世七代。時質人淳。情欲無分。和哥未作。逮于素。

戔鳥尊。到出雲國。始有三十一字之詠。今反哥之作也。其。

後雖天神之孫。海童之女。莫不以和哥通情者。爰及人代。



シマニワガキネシイ  
 トゴトモヲジヨノコ  
 姫はみこを戀ひしく思  
 つて再び歸つてきたい  
 が義としてできないの  
 よこしてみこを養ひま  
 返歌にそのときのま  
 アカダマノヒカリハ  
 アリトヒトハイヘド  
 キミガヨソヒシタフ  
 トクアリケリ  
 ○混本—五七七に  
 て終の七を缺くものと  
 十篇をもつて什とした  
 故である。數詞から轉  
 じて實體をさすのであ  
 る。  
 ○富緒川—大和國添  
 下郡太子—聖德太子。  
 太子が片岡にて飢ゑる  
 旅人をみて飲食衣服を  
 あたへ歌をよまれたと  
 き旅人が頭を上げて  
 イカルガヤトミノワ  
 ガハノタエバコソワ  
 ガオホギミノコソワ  
 ワスレメ  
 とよんだ（拾遺集卷末  
 參照）  
 ○民之欲—民の欲す  
 るところは天が必ず  
 從ふとの心  
 ○澆漓—ゲウリ。う  
 すし

此風大興。長哥短哥旋頭混本之類。雜躰非一。源流漸繁。譬猶拂雲之樹。生自寸苗之煙。浮天之波。起於一滴之露。至如難波津之什獻。

天皇富緒川之篇報。太子或事關神異。或興入幽玄。但見上古哥。多存古質之語。未爲耳目之翫。徒爲教戒之端。古

天子斯新每良辰美景。詔侍臣預宴筵者。獻和哥。君臣之情。由斯可見。賢愚之性。於是相分。所以隨民之欲。擇士之才也。自天武天皇第三子大津皇子之初作詩賦。詞人才子。慕風繼塵。移彼漢家之字。化我日本國語日域之俗。民業一改。和哥漸衰。然猶有先師柿本大夫者。高振神妙之思。獨步古今之間。有山邊赤人者。並和哥仙也。其餘業和哥者。綿々不絕。及彼時變澆漓人

○文琳—文屋の康秀の字

貴奢淫。浮詞雲興。艷流泉涌。其實皆落。其華孤榮。至有好色之家。以此爲花鳥之使。乞食之客。以此爲活計之謀。故半爲婦人之右。難進大夫之前。近代存古風者。纔二三人。然長短不同。論以可辨。華山僧正。尤得哥躰。然其詞華而少實。如圖畫好女。徒動人情。在原中將之哥。其情有餘。其詞不足。如菱花雖少。彩色而有薰香。文琳巧詠物。然其躰近俗。如賈人之著鮮衣。宇治山僧喜撰其詞華麗。而首尾滯滯。如望秋月。遇曉雲。小野小町之哥。古衣通姬之流也。然艷而無氣力。加病婦之著花粉。大友黑主之歌。古猿丸大夫之次也。頗有逸興。而躰甚鄙。如田夫之息花前也。此外氏姓流聞者。不可勝數。其大底皆以艷爲基。不知哥之趣者也。俗人爭事營新榮利。不用詠和哥。悲哉。雖貴兼相



○野宰相——參議小野篁  
 ○輕情——文粹には雅情  
 ○在納言——中納言在原行平

將富餘金錢而骨未腐於土中。名先滅世上。適為後世被  
 知者。唯和哥之人而已。何者。語近人耳。義貫筋慣神明也。昔  
 平城天子詔侍臣。令撰萬葉集。自爾以來。時歷十代。數過  
 百年。其後和哥棄不被採用。雖風流如野宰相。輕情如在  
 納言。而皆以他才聞。不以斯道顯。  
 陛下御宇。天下筋于今九載。仁流秋津洲之外。惠茂筑波山之陰。  
 淵變為瀨之聲。寂々閉口。砂長為巖之頌。洋々滿耳。思繼  
 既絕之風。欲興久廢之道。爰詔大內記紀友則。御書所預  
 紀貫之前。甲斐少目凡河內躬恒。右衛門府生壬生忠岑  
 等。各獻家集。並古來舊哥。曰續萬葉集。於是重有詔。部類  
 所奉之歌。勒為二十卷。名曰古今和哥集。臣等詞少春花  
 之艷。名竊秋夜之長。况哉進恐時俗之嘲。退慙才藝之拙。

●十八日——靜嘉堂文庫の頼阿本及び筋切は十五日

適遇和哥之中興。以樂吾道之再昌。嗟乎人丸既沒。歿筋和哥  
 不在斯哉。于時延喜五年歲次乙丑四月十八日。臣貫之  
 等謹序



此集家、所稱雖說、多且任師說又  
加了見爲備後學之證本不顧老  
眼之不堪手自書之

近代僻案之好士<sup>鎌嘉</sup>以書生之失錯稱  
有識之秘事可謂道之魔姓不可  
用之但如此用捨只可隨其身之所好  
不可存自他之差別志同者可隨之<sup>用嘉</sup>

貞應二年七月廿二日癸亥

戶部尙書藤<sup>御判</sup>

同廿八日令讀合訖書入落字了

傳于嫡孫可爲將來之證本

此古今奉附屬良守上人了

文和二年三月十八日

西方行者頓阿



# 作者略傳及人名索引

## ア

アカヒト 赤人  
山部氏。萬葉集に載つてゐる歌は神龜元年(一三八四)から天平八年(一三九六)までの間である。序に人丸赤人を並べたのは家持が山柿の門といつたのに依るといふ説があり、或は山は山上憶良であらうといふ説もある。序の書きやうでは人丸よりは少し劣つてゐたと考へられてゐたのであらうといふ説がある。自然をよむ歌人として後世に影響が多い  
序、一〇、二四四  
アキミネ 秋岑  
紀氏。善峯の子  
歌 四八、八〇  
アキラケイコ 慧子  
文徳天皇の御子。嘉祥三年齋院  
詞 一九一  
アキラケイコノハ、慧子母

詞 一九一  
アサヤス 朝康  
文屋氏。康秀の子。延喜二年二月廿三日大舍人大允  
歌 五九  
アツマビト 東人 中臣氏  
歌 一五六  
アツユキ 篤行  
平氏。興我王の子。延喜三年正月從五位下、九年九月太宰少貳。十年正月卒  
歌 一一二  
アツユキ 淳行  
伊香(イカゴ)氏  
歌 九二  
アツユキノアソン  
歌 五八、六〇、六二  
アツヨシ 敦慶  
註 一八四  
アマツカミノミマゴ 天神之孫  
序 二四二

アマネイコ 治子  
春澄氏。善繩の子。仁和三年正月八日從四位下掌侍、延喜二年正月九日從三位  
歌 三九  
アメノミカド 天智天皇の御事  
歌 一五四、一六三、二四二  
アヤモチ  
元永本には山もちとあり、宮内省の頼阿本には作者名がない  
歌 二四一  
アリスケ 有輔  
御春氏。延喜二年二月廿三日左衛門權少志、十二年三月廿七日權少尉。敏行の家入にて河内國の人といふ  
歌 一四〇、一八三  
アリスエ 有季  
文屋氏  
歌 二二四  
アリツネ 有常  
紀氏。貞觀十五年正月七日從五位下、元

慶元年周防權守

歌 一〇七

アリツネノムスメ 有常女

歌 一六八

アリトモ 有朋 又は有友

紀氏。元慶三年正月七日從五位下、八月十七日宮内少輔。四年卒

歌 三一、二二七 詞 一八三

アリホ 有穂

註 三九

## イ

イウセン 幽仙

藤原氏。尊卑分脈には幽仁とある。總繼の孫にて宗道の子。寛平七年十月律師。昌泰三年二月寂。延暦寺の座主

歌 九七、九八

イセ 伊勢

藤原氏。繼蔭の女。七條後の女房。寛平の間更衣にて皇子を生んだ。後に敦慶親王との間に中務を生んだ

歌 二四、二六、三〇、三一、四五、一五、一四九、一五〇、一五八、一六〇

作者略傳及人名索引

一六四、一六七、一七〇、一七三、一九八、一九九、二〇七、二二二、二二五、二二二、二三〇

イルタ 至

註 二一一

イトナインシワウ 伊豆内親王

註 一九四

イナバ 因幡

仲野親王の孫にて、基世王の女。基世王は仁和五年正月因幡守

歌 一七三

イマミチ 今道

布留氏。元慶六年從五位下、寛平十年正月三河介

歌 六〇、一八七、二〇三

## ウ

ウツク 籠

大納言定の孫にて、大和守精の女

歌 九三、一四三、一六〇

ウネメ 采女(陸奥)

序 三

ウネメ 采女(近江)

詞 一四四、一六三

註 一五四、二四二

歌 一四五、一四七、一五四、一六四、二四二

ウリンキンノミコ 雲林院親王

常康親王。仁明天皇の第七皇子。仁壽元年二月御出家、貞觀十一年五月十四日薨去。雲林院は親王の別業であつたのを通昭に付屬して寺となされた

歌 一六八 詞 三七、九七

オキカゼ 興風

藤原氏。濱成の曾孫にて道成の子。延喜十四年四月廿二日下總權大掾。管弦を能くした

歌 三八、四四、五二、七六、七七、八〇、八七、一三〇、一六一、一七三、一九五、二二七、二三〇、二三二

オト 乙

遠江介壬生益成の女。益成は、元慶仁和の御代の人である

歌 一〇五



オトンド 音人

註 四八

オホササギノミカド

序 三、四、(二四四)

オホツクラウシ 大津皇子

序 二四四

オホヨリ 大頼

宗岳氏。算博士

歌 一三四、二二〇

詞 二一〇

カ

カヅノリノオホキミ 景式王

惟條親王の御子。寛平九年七月十三日、

從四位下

歌 一一三、一六九

カチオン 勝臣

藤原氏。發生の子。元慶七年阿波權掾

歌 六六、一一〇、一一八、二二五、二

四〇

カツラギノオホキミ

序 四

カネスケ 兼輔

藤原氏。利基の六男にて、兼茂の弟。延

長五年正月十二日從三位中納言、承平三

年二月十八日薨去、年五十七。家が加茂

川の堤にあつたので堤中納言と呼ばれ

「堤中納言物語」の作者に擬せられてゐ

る

歌 九七、一〇六、一六三、二二五

カネミノオホキミ 兼覽王

惟喬親王の御子。延長二年正月七日正四

位下、三年六月宮内卿。承平二年卒

詞 九九

歌 六一、七五、九八、一一四、一六七

カネモチ 兼茂

藤原氏。利基の三男にて兼輔の兄。延長

二十三年正月十二日參議、同廿一日左兵

衛督。同三月七日卒、陣の座にて中風を

起したのがもとであつた

歌 九五、九六

カハラノヒダリノオホイマウチギミ 河原

左大臣

歌 一五七、一八八

詞 一八一、一八二

カンキン 閑院

延喜の頃の命婦といふ

歌 一六〇、一七八

カンキンノゴノミコ 閑院五親王

廣井女王。天武天皇の後。齊衡元年正月

八日從三位、天安元年十二月尙侍。貞觀

元年十月廿三日薨、御年八十餘。或は嘉

祥三年權典侍ともいふ

歌 一八四

キ

キセン 喜撰。又は基泉。一本には撰喜

序 一三、二四五

歌 二一一

キノメノト 紀乳母

名は金子。嵯峨天皇の孫源澄の妻にて、

陽成天皇の御乳母。元慶六年正月八日從

五位上

歌 一一四、二二七

キミトシ 藤原氏

詞 九三

キヨキ 清興

宮道氏。延喜七年二月廿九日貫之にかは

つて、越前權少掾に任ぜられた

歌 二〇六

キヨキ 清樹

橘氏。長谷雄の孫にて數雄の子。寛平八

年正月廿六日阿波守、昌泰二年三月卒

詞 一四六

歌 一四六

キヨトモ 清友

橘氏。奈良麿の子

歌 四二

キヨフ 清生

詞 九一

キヨユキ 清行

安倍氏。安仁の子。寛平六年正月十五日

讃岐守、同七年八月從四位上。昌泰三年

卒、年七十六

歌 一一四、一二九 註 二三一

ク

クズナホ 葛直

註 二二二

クソ 尿

歌 二三一

クニツネ 國經

藤原氏。長良の長子にて基經の兄。延喜

二年正月廿六日大納言、同三年正月七日

正三位、同八年六月廿九日薨。年八十二

歌 一四二

詞 一八七

クロメシ 黒主

大友氏

序 一四、二四五

歌 三六、一五九、一九三

クワウカウテンワウ 光孝天皇

ニナナノミカドを見よ

クワンビヤウノオホントキノキサイノミヤ

詞 二一、二三、二七、二九、三七、三

八、四一、四一、四四、四七、五二、五

七、六二、六三、六八、六九、七六、八

〇、八三、一二九、一四二、一四七、一

五二、一五六、一七三、一九四、二二六

二二七

ケ

ケウシン 敬信

藤原因香朝臣の母。小野千古の母とも

歌 一九一

ケンゲイ 兼藝

伊勢少掾古之二男にして、大和城上郡の

人 歌 九八、一六六、一七二、一八九

コ

ゴデウノキサイ 五條后

詞 一六二、(一四一)

コトナホ 言直

藤原氏。安繩の子。昌泰三年因幡掾

歌 二一

コマチ 小町

小野氏。出羽國司女

序 一三、二四五

詞 一二八、二〇二

歌 四〇、一一五、一二八、一二九、一

三九、一四二、一四六、一五七、一六八

一七一、一七四、二〇二、二二七、二四

〇

コマチガアネ 小町が姉

歌 一七〇

コレサダノミコ 是貞親王

詞 五四、五四、五五、五六、五七、五



八、五九、六〇、六二、六五、六七、六八、六八、六九、七一、七四、七四、七七、一三二

コレタカノミコ 惟喬親王

文徳天皇の第一皇子。御母は紀静子、名虎女。天安二年十一月廿五日帥、貞觀十四年七月御出家、御法名算延。同十五年二月廿日薨去、御年廿六。小野宮と申す

歌 三二、二〇三 註 二〇〇

詞 一〇六、一八三、一九一、二〇七  
コレノリ 是則

坂上氏。延長二年正月七日從五位下、加賀介

歌 六八、七六、八〇、八二、一三四、一七五、二〇〇

コレモト 惟禰

藤原氏

歌 一八五

コレヲカ 惟岳

紀氏。或は菅原惟然。或は惟照

歌 八六

コレヲカ

藤原氏  
詞 九六

コンキンノミギノオホイマウチギミ 近院右大臣

源能有。文徳天皇の第一源氏、仁壽三年源姓を賜はつた。寛平二年正三位、同八年七月十六日右大臣。寛平九年六月八日薨去 年五十三

歌 一五九、一八一、一八七

註 二一

詞 一五九

サ

サキノオホキオホイマウチギミ 前太政大臣

藤原良房のこと、冬嗣の子。天安元年二月十九日太政大臣、四月十九日從一位、貞觀二年八月十九日攝政、十三年四月十日准后。十四年九月二日薨、年六十九  
忠仁公、染殿の大臣、白河の大臣

詞 一七六

歌 二〇、二八、四〇、一八六

サダカタ 定方

藤原氏。高藤の子。延長二年正月廿二日右大臣、四年正月七日從二位、八年十二月十七日左近大將。承平二年八月四日薨年六十三、贈從一位、三條右大臣

歌 六〇

サダキ 貞樹

小野氏。齊衡二年正月七日從五位上、貞觀二年正月十六日肥後守。或は橋氏にて清樹の兄か(系圖四参照)

歌 一六八、二〇一

サダクニ 定國

詞 八八

サダトキノミコ 貞辰親王

詞 八六、九一

サダトキノミノヲバ

詞 八六

サダフン 定文

平氏。茂世王の孫にて好風の子。延喜廿二年正月七日從五位上、延長元年六月廿二日參河權介。同九月廿七日卒

歌 六二、六二、七一、一四七、一四八

一七五、二〇六、二二八

サダヤスノミコ 貞保親王

詞 八六

サヌキ 讚岐

讚岐守安倍清行の女

歌 二三一

サネ 實

源氏。舒の子。寛平九年七月十三日從五位上、昌泰二年正月十一日信濃守、三年卒

詞 九五、九六

歌 九六

サルマルダイフ 猿丸太夫

序 二四五

サンデウノマチ 三條町

紀氏。名虎の女、名は静子、町は局の名か、文徳天皇の更衣にて惟喬・惟條親王の母

歌 二〇〇

サンデウノミギノオホイマウチギミ 三條右大臣

詞 六〇

シ

シゲカゲ 滋藤

作者略傳及人名索引

小野氏。仁和四年十一月廿五日從五位下  
寛平五年四月廿九日掃部頭。八年卒

歌 一〇九

シキブキヨウノミコ 式部卿親王

詞 一八四

シゲハル 滋春

在原氏。業平の次男。在次の君

歌 八七、九一、一〇八、一一三、一一六、一八五

シタテルヒメ 下照姫

序 二

シタテルヒメノセウトノカミ

序 二

シチデウノチュウグウ 七條中宮

詞 二〇七、二二二

シユウエン 勝延

笠氏。昌泰元年十二月十六日少僧都。延喜元年二月十八日寂、年七十五。紀氏に勝延があつて承均の兄になつてゐる  
(系圖三参照)

歌 一七七

シユウホウ 聖寶

弘文天皇の孫にて葛野王の子。延喜元年

正月十一日東大寺の別當、二年三月廿日僧正。九年七月寂、年七十、又は七十六

歌 一一七

シロメ 白女

歌 九六

シンセイ 眞靜

歌 一一四、一九八

詞 一二八

シンタイ 神退

近江國滋賀郡の人

歌 一九九

ス

スガネ 菅根

藤原氏。良尙の子。昌泰二年二月十一日文章博士、宣旨を奉じて史記を講じた。延喜六年十一月從四位、後に侍從參議を兼ねた。八年七月七日卒、年五十四、侍讀の功によつて贈從三位

歌 五七

スガハラノアソン 菅原朝臣 道眞のこと

歌 七〇、一〇七



スサクノキン 朱雀院  
詞 六〇、一〇七、一一一、一九九  
スサノヲノミコト  
序 二、二、二四三

セ

セイシン  
詞 一二八  
セウセンコウ 昭宣公  
註 八六  
セキヲ 關雄

藤原氏、内膳の孫にて眞夏の子。閑適を好み東山に籠つて林泉を愛したので東山進士と呼ばれた。承和元年の秋淳和上皇に仕へ、鼓琴に秀でゝゐたので秘譜を授けられた。又草書を能くした。仁壽二年齋院長官。三年二月卒、年四十九  
歌 七二、七三、七三

ソ

ソウク 承均  
元慶の頃の人。紀氏に承均といふのがあつて勝延の弟になつてゐる(系圖三参照)

歌 三三、三三、一九八

ソセイ 素性

通昭の子にて、名を弘延といふ。清和天皇の御代に左近將監であつたが父が出家してから出家の子に俗人があるのをもかしいとして押して出家させられた。寛平八年雲林院行幸の日弟の由性と共に權律師を賜はり石上の良因院に住した。昌泰元年宮瀧遊覽記に住所の名をとつて、良因朝臣を賜つたとある。延喜中、屢々屏風をかいた

歌 二〇、二五、二七、二九、二九、三二、三三、三七、三七、三七、三九、四〇、四三、四六、五三、六一、六二、六三、七〇、七四、七七、八七、八八、八八、一〇七、一一八、一二八、一三一、一五二、一五六、一五七、一七一、一七二、一七六、二〇三、二二四

ソトホリヒメ 衣通姫

允恭帝の妃にして、忍坂大中姫皇后の妹名は弟姫。その容姿艶妙にて、光が衣を徹したので、世の人が「ソトホシノイラツメ」ト稱した

序 一三、二四五 詞 一六五  
歌 一五二、二四二

ソメドノノキサキ 染殿后  
詞 二八

タ

タイシ 太子 聖德太子のこと  
序 二四四  
タイスケ 大輔  
歌 二三一  
ダイドウテンシ 大同天子  
註 三六

タカツネ 高禰

註 一六九

詞 一八一

タカツノミコ 高津親王  
註 二〇五

タカフヂ 高藤

註 八八

タカムラ 篁

小野氏。岑守の子。承和元年遣唐副使に任ぜられたが大使と争つて官を停められ、隱岐國へ流された。後に召還され勸

解由長官從三位にまで至つた。仁壽二年十二月廿二日薨、年五十一

歌 八二、一〇二、一七六、一八〇、二〇一、二〇五

序 二四六

タカヨ 高世

菅野氏。眞道の子。弘仁十一年周防守

歌 三四

タスク

註 二三一

タミオン 忠臣 菅野氏

歌 一七三

タマフサ 忠房

藤原氏。廣敏の孫にて是嗣(イ興)の子。延喜十五年正月五位下、延長三年正月山城守。笛の名手で胡蝶樂を作つたといはれてゐる。延長六年十二月一日卒

歌 五五、一三一、一九六、二一三

詞 一七八

タマミネ 忠岑

壬生氏。藤原定國の隨身であつたが後左近衛番長、右衛門府生、御厨子所、攝津權大目に累遷して、六位に叙せられた

作者略傳及人名索引

序 一五、二四六

歌 二一、四八、四九、五三、五五、五七、六一、六七、六八、七四、七七、八一、八一、八九、一〇八、一一五、一二〇、一三〇、一三三、一三四、一三五、一三六、一四〇、一四〇、一七七、一七八、一七九、一七九、一八八、一九七、一九九、二一九、二二八

タムニキ 忠行

藤原氏。有貞の長子。寛平二年正月七日從五位下、延喜六年正月廿一日若狭守

歌 一五〇

タムラノミカド 田村帝

詞 一九一、(二〇〇)(二〇五)

チ

チザト 千里

大江氏。音人の子。延喜三年三月廿六日兵部大丞

歌 二一、四八、五四、六九、一七一、一三一、一四三、一八五、二一五、二二二

チフル 小野氏

詞 九〇

チフル 千古 大江氏

詞 九七

チフルガハハ 千古母

歌 九〇

チユウジンコウ 忠仁公

註 二八、一七六

チヨウ 寵 ウツクを見よ

ツ

ツクル

註 二三一

ツネミ 經覽

阿保氏。昌泰三年五月算博士、延喜七年正月從五位下、十二年正月十七日卒

歌 一一五

ツネナリ

詞 八八

ツネヤスノミコ 常康親王

註 一六八

ツラキ 列樹

春道氏。新名宿禰の長子。延喜二十年正月廿日壹岐守に任ぜられたがまだ發向しないで卒した

二五七



歌 七六、八三、一三六

ツラユキ 貫之

紀氏。この集の序に御書所預とある。次いで越前權少掾、内膳典膳、少内記、大内記、加賀、美濃の介、大監物、右京亮をへて、延長八年正月土佐守に任ぜられた。承平四年任が果て、歸るときの海上紀行が「土佐日記」である。天慶三年三月支蕃頭に任ぜられ六年正月七日從五位上に昇り八年三月木工權頭に任ぜられ九年卒した。「新撰和歌」(群書類従一五九)は勅命により古今集中の精撰歌及びその他三百六十首を採つて献上しようとしたものであるがその目的を達しなかつたものである。天慶六年以後八年以前と推定される漢文の序がある

序 一五、一六、一六、二四六、二四七  
詞 六二、九八、一九六  
歌 一九、二一、二二、二三、二三、二五、二六、二七、二七、二九 三三、三四、三四、三六、三六、三七、三八、四〇、四一、四二、四三、四八、四九、四九、五一、六〇、六二、六六、六七、六

七、七一、七二、七五、七五、七八、七八、八〇、八一、八二、八三、八七、九一、九四、九四、九五、九六、九八、九八、九〇五、一〇九、一〇九、一一一、一一一、一一三、一一三、一一五、一一五、一一八、一一九、一一九、一二〇、一二一、一二一、一三二、一三二、一三三、一三三、一三三、一三五、一三五、一四一、一五〇、一五三、一五三、一五八、一五八、一七二、一七七、一七八、一七九、一八一、一八二、一八二、一九〇、一九六、一九七、二〇〇、二一〇、二二七、二二三、二四〇、二四〇、二四二

七、七一、七二、七五、七五、七八、七八、八〇、八一、八二、八三、八七、九一、九四、九四、九五、九六、九八、九八、九〇五、一〇九、一〇九、一一一、一一一、一一三、一一三、一一五、一一五、一一八、一一九、一一九、一二〇、一二一、一二一、一三二、一三二、一三三、一三三、一三三、一三五、一三五、一四一、一五〇、一五三、一五三、一五八、一五八、一七二、一七七、一七八、一七九、一八一、一八二、一八二、一九〇、一九六、一九七、二〇〇、二一〇、二二七、二二三、二四〇、二四〇、二四二

テ

テイシノキン 亭子院

詞 三一、三六、四四、七六  
序 二四四

ト

トウグウ 東宮

詞 三四、三五、八九、二〇六、二二三

トキハル

註 八七

トキブミ 時文

歌 四一

トシサダ 利貞

紀氏。貞守の子。元慶三年十二月廿五日從五位下、五年阿波介。同年卒

歌 四五、九一、九一、一一二

詞 二〇七

トシハル 利春

高向氏。延喜十四年二月廿三日從五位下

延長六年正月廿九日甲斐守

歌 一一三

トシモノアソン

詞 一八二

トシユキ 敏行

藤原氏。富士磨の子。寛平九年七月十三日從四位上、九月右兵衛督。延喜七年卒

或は昌泰四年ともいふ

歌 五一、五五、五八、六〇、六二、六六、六九、七四、一〇八、一二九、一三二、一三八、一三九、一四二、一八九、一九五、二二五、二三九

詞 一五四、一七七

トモノリ 友則

紀氏。延喜四年正月廿五日大内記六位。初めはこの集の撰者の棟梁であつたが、功を終へないで卒した

序 一五、二四六

詞 一七八

歌 二一、二五、二九、二九、三五、四六、四七、五二、五六、六八、六九、七〇、八二、九五、一〇〇、一一〇、一一一、一一一、一一二、一二九、一三四、一三六、一三七、一四七、一四八、一五一、一五六、一六四、一六九、一七〇、一七五、一七七、一八三、一九〇、二二二

ナ

ナイシノカミ

詞 八八

ナカキ 中興

平氏。忠望王の子。實は右大辨秀長の子といふ。延喜廿二年正月卅日美濃權守

歌 二二〇、二二〇

ナカツカサノミコ 中務親王

作者略傳及人名索引

詞 一九七

ナカヒラ 仲平

藤原氏。基經の二男、時平の弟。寛平元年左大臣、六年正月七日正二位。八年九月一日出家して靜寛といひ同五日薨、年七十一、枇杷大臣といふ

歌 一六三 詞 一六七

ナカマロ 仲磨

安倍氏。船守の子。靈龜二年遣唐留學生(年十六)、姓名を朝衡と改め左補闕、秘書監、衛尉卿などに任ぜられた。天寶十二年遣唐大使藤原清河に具して歸朝の途に上つたが颶風に遇つて安南に漂着し、土匪の迫害をうけた。辛じて逃れて唐に還つて仕へた。大曆五年正月(我が國の寶龜元年)卒、年七十三

歌 一〇一

ナガモチ

歌 一九九

ナガモリ 長盛

橋氏。延喜廿六年從五位下長門守。文章博士直幹の父

歌 一九九

ナザネ 名實

矢田部氏。昌泰二年大内記。三年卒

歌 一一二

ナトラ 名虎

註 三二、八七

ナホイコ 直子

藤原氏。典侍、延喜二年正月九日正四位下

歌 一七二

ナムマツ

詞 一八七

ナラノミカド 奈良帝

平城天皇。大同元年三月十七日踐祚、五月即位、四年四月廿五日讓位、弘仁元年御出家。天長元年七月七日崩御、御年五十一(エイジャウテンワウ、ダイドウテシを合せ見よ)

序 九、一〇

歌 三六、五九、七二、七三

ナリヒラ 業平

在原氏。阿保親王の子。天長三年在原の姓を賜つた。貞觀七年三月右馬頭、十九年正月左近衛權中將、元慶元年十一月從



四位上。四年五月廿八日卒、年五十六。その妻は紀有常の女にて、有常の妹は惟喬親王の御母なので、惟喬親王を押して藤氏に對抗しようとしたのである。然し文徳天皇は親王に確かな御うしろみがないので清和天皇に御譲位になつた

序 一二、二四五 註 二二

詞 一三八、一四三、一五四、一五五、一六八、

歌 二八、三〇、三〇、四四、六二、六九、七四、八六、一〇三、一〇六、一一九、一三八、一三八、一三九、一四一、一四三、一四四、一五四、一五五、一六二、一六八、一八五、一八七、一八八、一九〇、一九一、一九四、一九八、二〇七

ナリヒラノハ、ノミコ 業平の母の親王

伊登内親王。桓武帝第七の皇女。阿保親王との間に平業平を生んだ。貞觀三年九月薨去

歌 一九四

ニ

ニデウ 二條

歌 二二一

ニデウノキサキ 二條后

藤原氏。名は高子。長良の二女。母は總繼女。清和帝の女御となり、陽成帝を生み奉つた。元慶元年正月立后、同六年正月皇太后となつたが其の後、東光寺の僧善祐と好し、寛平八年九月に后位を停められ、朱雀帝の天慶六年に本位を復せられた。延喜十年三月廿四日薨

詞 二〇、七四、一一二、一八八

歌 一九 註 八六

ニシナノオホントキノチュウジャウノミヤ

スンドコロ 仁和御時中將御息所

詞 三六、三九、四〇

ニシナノミカド 仁和帝

光孝天皇の御事、諱は時康、仁明天皇の第三子。元慶八年二月御位に即かれ、仁三年八月廿八日崩御、御年五十七

歌 二二、八五

詞 六三、八六、九八

註 五四、(二三六)

ニシミヤウ 仁明

註 一六六、一六八、一八〇

ノチカゲ 後蔭

中納言藤原有種(又有種)の子。延喜十九年正月七日從四位下備前權守

歌 三九 詞 九五

ノボル 登

仁明帝の第十五皇子。母は更衣三國の町承和の始め源姓を賜はつてゐたが母の過失によつて屬藉を削られたので出家して深寂と號した。貞觀八年還俗して不遇であつたが諸皇族の奏言によつて貞朝臣を賜はつた。蓋し母の過失ある子は再び源姓に復することができないのであつた。これから任官して寛平五年正月紀伊權守に任ぜられ同六年正月七日正五位下に昇つた

歌 一六六

ノボル 昇

詞 一六〇

三、二〇七、二二六、二二九、二二九

ヘイカ 陛下

序 二四六

ヘイジャウテンワウ 平城天皇

ナラノミカドを見よ

註 三六

序 二四六

ヘンゼウ 遍昭

ヨシムネノムネサダを見よ

序 一一、二四五

詞 三二、五九、六三、七七、八五

歌 二三、四一、五〇、五九、六四、七四、八六、九七、九七、一一〇、一一七

一六六、一七七、一八一、二二五、二二六

ホ

ホドコス 惠 又は忠

源氏。大納言弘の孫、彌の子。延長六年正月廿六日丹波守。九年卒

歌 一一六

ホフワウ 法皇

ホドコス 惠 又は忠

源氏。大納言弘の孫、彌の子。延長六年正月廿六日丹波守。九年卒

歌 一一六

ホフワウ 法皇

ハ

ハルカゼ 春風

小野氏。寛平二年九月廿日陸奥權守、三年正月廿日讃岐權守、昌泰元年正五位下

歌 一四五、二〇六

ヒ

ヒガシサンデウノヒダリノオホイマウチギ

ミ 東三條左大臣

歌 二五

ヒダリノオホイマウチギミ 左大臣

藤原時平のこと。昌泰二年左大臣。延喜九年四月四日薨、年三十九

歌 六〇、二三〇

ヒデヲカ 秀崇

良岑氏。寛平八年正月七日從五位下、同廿六日伯耆守

歌 九三

ヒトザネ 人眞

酒井氏。延喜十四年正月從五位下、同廿二日土佐守。十七年四月卒

歌 一六〇

ヒトマロ 人麿

序 一〇、一六、二四四

註 七三

歌 四五、五七、八二、一〇二、一三九

一四九、一九五、(二一九)

ヒヤウエ 兵衛

藤原氏。高經の女。高經が右兵衛の督であつたので女を兵衛といつたのであらう。尊卑分脈には忠房室とある

歌 一一四、一六九

フ

フカクサノミカド 深草帝

序 一三

詞 一八〇、一八〇

フカヤブ 深養父

清原氏。道雄の曾孫、海雄の孫、房則の子。延喜八年正月内匠允。延長元年六月廿二日内藏大允、八年十一月廿二日從五位下

歌 三四、四三、五〇、七五、八一、九三、一〇九、一一三、一三二、一三三、一三五、一三七、一四七、一五一、一五



詞 一九七、一九八、二三三  
ホリカハノオホキオホイマウチギミ 堀川  
太政大臣  
詞 一七六  
ホシキンノオホキオホイマウチギミ 本院  
太政大臣  
註 六〇

マ

マサズミ 當紳  
源氏。能有の子。延喜三年二月少納言、  
七年從五位上  
歌 二一

ミ

ミクニノマチ 三國町  
紀氏。名虎の女。仁明天皇の更衣、貞朝  
臣登の母  
歌 四七  
ミチザネ 道眞  
スガハラノアソムを見よ  
ミチノク 陸奥  
橘氏。葛直の女

歌 二一二

ミツネ 躬恒  
凡河内氏。寛平六年二月廿八日甲斐權少  
目、七年正月十三日丹波權大目、十一年  
正月十三日和泉權掾、任が満ちて歸洛の  
上、兼輔の粟田の山庄にて歌會を催した  
(後撰集卷十五)

詞 一九〇

序 一五、二四六  
歌 二四、二五、三一、三五、三八、三  
九、四二、四三、四四、四四、四九、五  
〇、五〇、五〇、五二、五四、五七、五  
八、六一、七一、七六、七六、七八、八  
一、八三、八八、九四、九四、九九、一〇  
五、一〇五、一二〇、一三二、一三三、  
一三五、一三六、一三六、一三七、一四  
二、一四七、一五一、一六三、一七〇、  
一七九、二〇〇、二〇四、二〇九、二一  
〇、二二一、二二四、二二五、二二八、  
二三三、二三三

ミネヲ 岑雄

上野氏。承和の頃の人  
歌 一七七

ミヅノヲノミカド

註 一六二、二四一、三三六  
ミヨシ 三善  
藤原氏  
詞 八七

ム

ムネサダ 宗貞  
眞岑氏。桓武天皇の孫、安世の子。仁明  
天皇の御代に藏人頭となつたが嘉祥三年  
三月二十一日天皇崩御によつて出家し、  
遍昭と號した。仁和元年十月廿日僧正、十  
二月十八日仁壽殿にて七十賀を贈つた。  
寛平二年正月十九日寂、年七十五、花山  
の元慶寺の座主(ヘンゼウを合せ見よ)

ムネサダ

註 一八一

詞 九三

ムネヲカノムスメ 宗岳娘  
歌 二三三  
ムネヤナ 棟梁

歌 一一六

ユ

ユキヒラ 行平  
在原氏。平城天皇の皇子阿保親王の子、  
業平の兄。父親王の奏によつて在原姓を  
賜つた。元慶六年正月十日中納言、八年  
二月廿三日正三位民部卿、九年二月廿日  
按察使、仁和三年四月十三日致仕。寛平  
五年卒、年七十六  
歌 二三、九〇、一九八、二〇五  
序 二四六

ヨ

ヨシアリ 能有  
註 一五九、一八一  
ヨシカ 良香  
都氏。貞繼の子、初めの名は言道。貞觀  
十四年四月渤海の使を接待するに當つて  
奏して良香と改めた。十五年正月七日從  
五位下、十八年四月一日侍從。元慶三年  
二月廿五日卒、年三十六、朗詠の「氣晴  
風梳新柳髮」の作者

在原氏。業平の子。寛平九年七月從五位  
上、十年二月廿三日筑前守。昌泰元年卒  
歌 二二、六三、一九四、二二六

ムネユキ 宗子

源氏。寛平六年正月七日從四位下、源姓  
を賜つた。承平三年十月右京大夫、天慶  
二年正月七日正四位下、同年卒  
歌 二三、五三、七九、一三九、一六九  
一七一

ムネユキ (或 アツユキ?) 致行  
歌 六〇

モ

モチユキ 茂行

紀氏。承和の頃の人

歌 一二四、一八二

モトカタ 元方

在原氏。棟梁の子。大納言國經の猶子と  
なつた

歌 一九、三八、四三、五五、五六、六

七、八三、一一九、一二〇、一四〇、一

四〇、一六三、二三二

モトノリ 元規

平氏。中興の子。延喜六年正月左衛門大  
尉、八年正月七日從五位下、幾くもなく  
て卒  
歌 九五  
モトヤスノミコ 本康親王  
詞 八七  
モトヨノオホキミ 基世王  
註 一七三  
モンムテンワウ 文武天皇  
序 一〇  
註 七二

ヤ

ヤカモチ 家持

歌 五九

ヤスヒデ 康秀

文屋氏。字は文琳、貞觀二年三月廿日刑  
部中判事、後三河掾、元慶元年正月十五  
日山城大掾、三年縫殿助  
序 一二、二四五  
歌 二〇、六五、一一二、一八〇  
詞 二〇二

ヤマモチ



歌 一一六  
ヨシカゼ 良風

藤原氏。滋賀の子とも正野の子とも。延喜十一年正月七日從五位下、後に出羽國城介

歌 三五

ヨシキ 美材

小野氏。篁の孫にて俊生の子。寛平九年七月十三日從五位下、昌泰三年二月廿日信濃權介。延喜二年卒

歌 六〇、一二九

ヨシサダ

詞 二〇七

ヨシナ 良名  
物部氏。六位の人といふ

歌 二〇四

ヨシナリ

註 一〇五

ヨシヒト 淑人

紀氏。長谷雄の子、淑望の弟。天曆二年正月廿日河内守

歌 二二八

ヨシフサ 良房

サキノオホキオホイマウチギミを見よ  
ヨシモチ 淑望

紀氏。長谷雄の子、或は貫之の猶子とも延喜十二年正月七日從五位上、十三年正月廿三日信濃權介、十九年卒。眞名序の作者

歌 六五、

序 二四三

ヨルカノアソン 因香朝臣

藤原氏。寛平九年十一月廿九日從四位下掌侍、母は敬信尼

歌 三四、八九、一五九、一五九

註 一九一

ヨロツヲ 萬男

難波氏

歌 九二

ワタツミノムスメ 海童之女

序 二四三

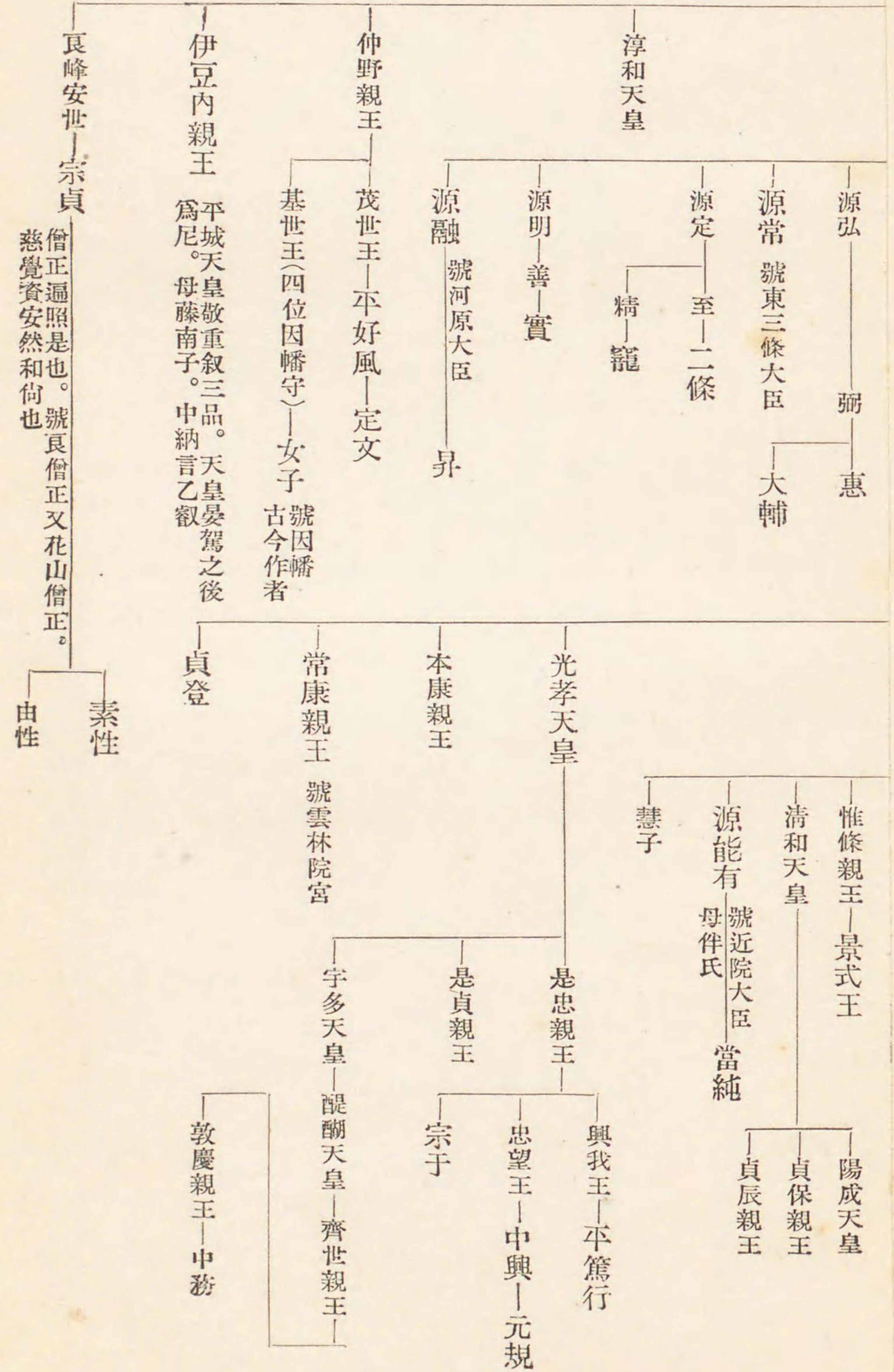
ワニ 王仁

序 三

ヲムネ 雄宗  
下野氏

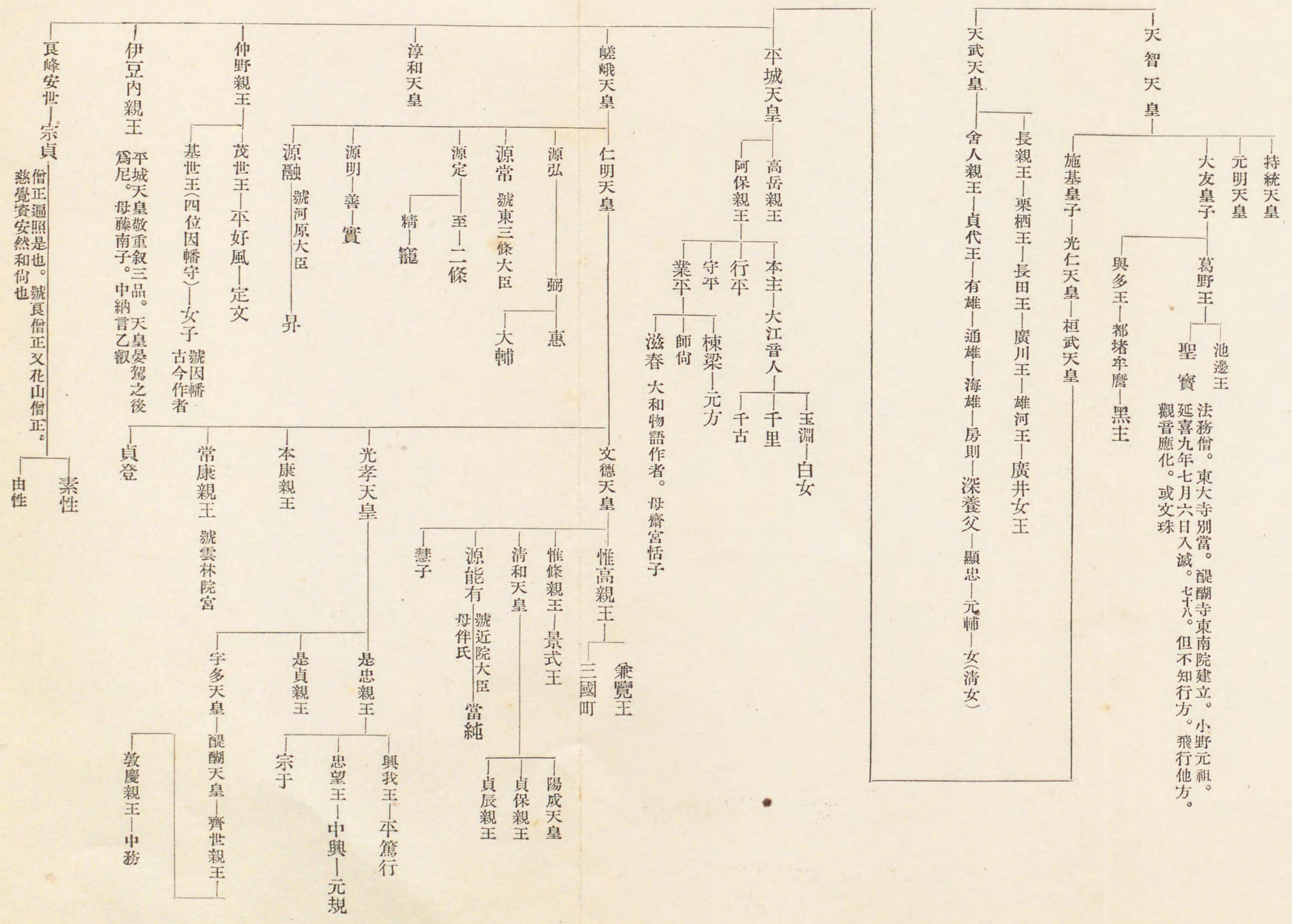
歌 一五八

(注意) 略傳は古今和歌集目録によつた。  
一つの作者名にて數首を兼ねたものも作者名は一つ擧げたのみであるから、その作者の歌數は索引にあげたものより多いことになる





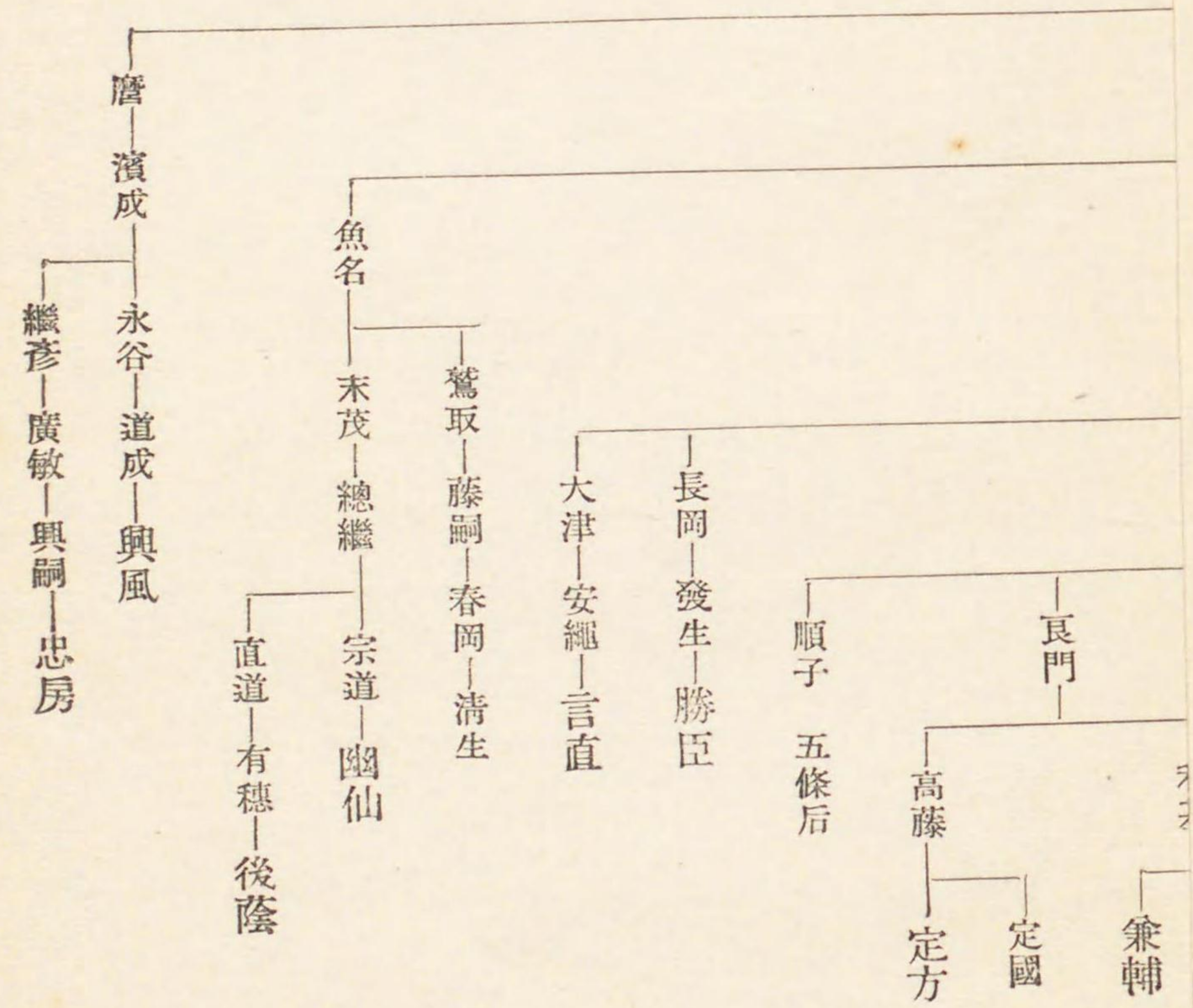
[一] 圖 系



天智天皇  
 持統天皇  
 元明天皇  
 大友皇子  
 葛野王  
 池邊王  
 聖寶  
 法務僧。東大寺別當。醍醐寺東南院建立。小野元祖。延喜九年七月六日入滅。七十八。但不知行方。飛行他方。觀音應化。或文珠。  
 與多王  
 都堵牟磨  
 黑王  
 天武天皇  
 長親王  
 栗栖王  
 長田王  
 廣川王  
 雄河王  
 廣井女王  
 舍人親王  
 貞代王  
 有雄  
 通雄  
 海雄  
 房則  
 深養父  
 顯忠  
 元輔  
 女清女

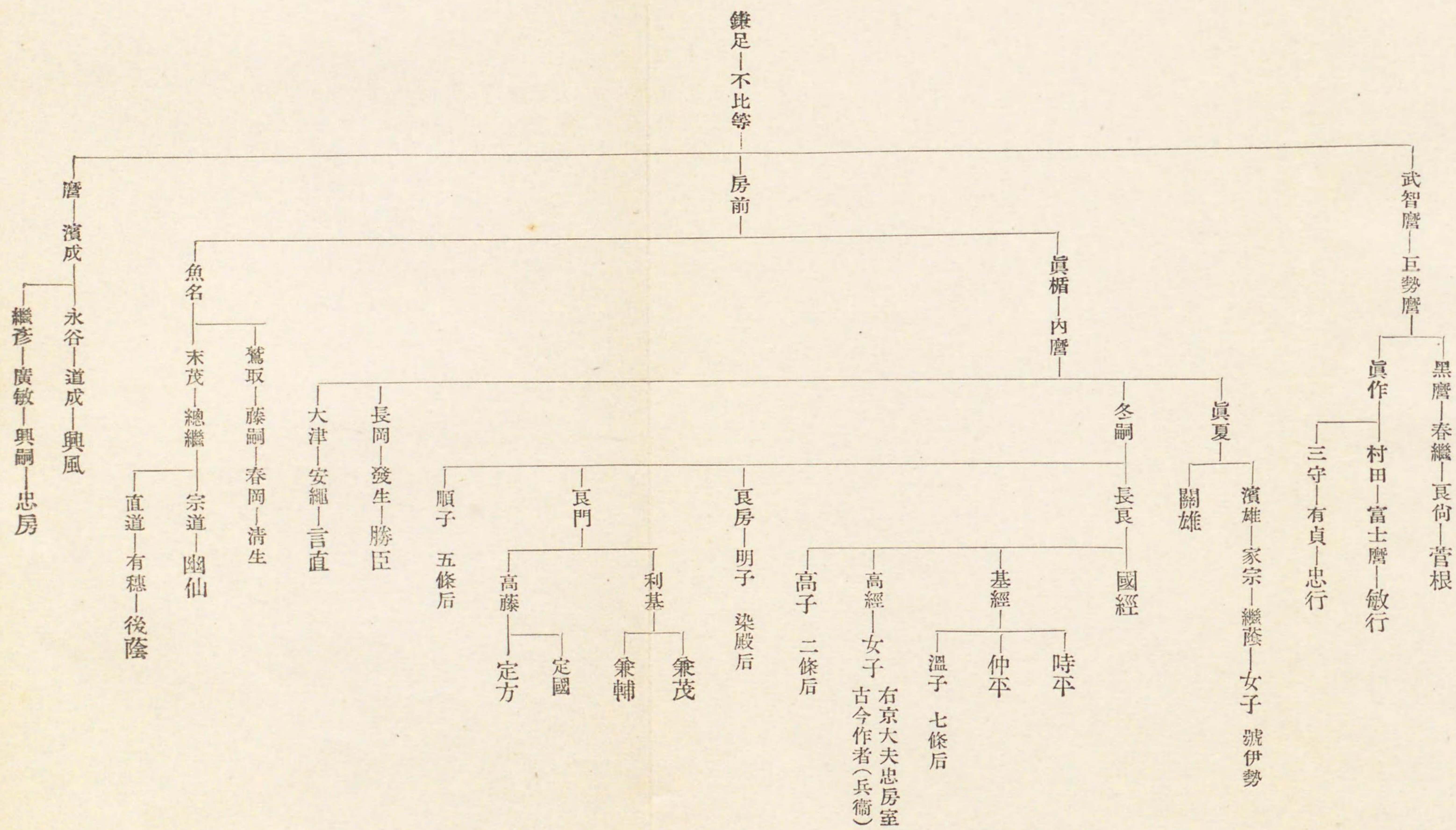
嵯峨天皇  
 仁明天皇  
 源弘  
 弼  
 惠  
 源常  
 號東三條大臣  
 大輔  
 源定  
 至一二條  
 精  
 寵  
 源明  
 善實  
 源融  
 號河原大臣  
 昇  
 仲野親王  
 茂世王  
 平好風  
 定文  
 基世王  
 四位因幡守  
 女子  
 號因幡  
 古今作者  
 光孝天皇  
 是忠親王  
 興我王  
 平篤行  
 是貞親王  
 忠望王  
 中興  
 元規  
 宗子  
 常康親王  
 號雲林院宮  
 宇多天皇  
 醍醐天皇  
 齊世親王  
 敦慶親王  
 中務  
 貞登  
 素性  
 由性  
 貞峰安世  
 宗貞  
 僧正  
 通照是也  
 號良僧正  
 又花山僧正  
 慈覺資安  
 然和尚也





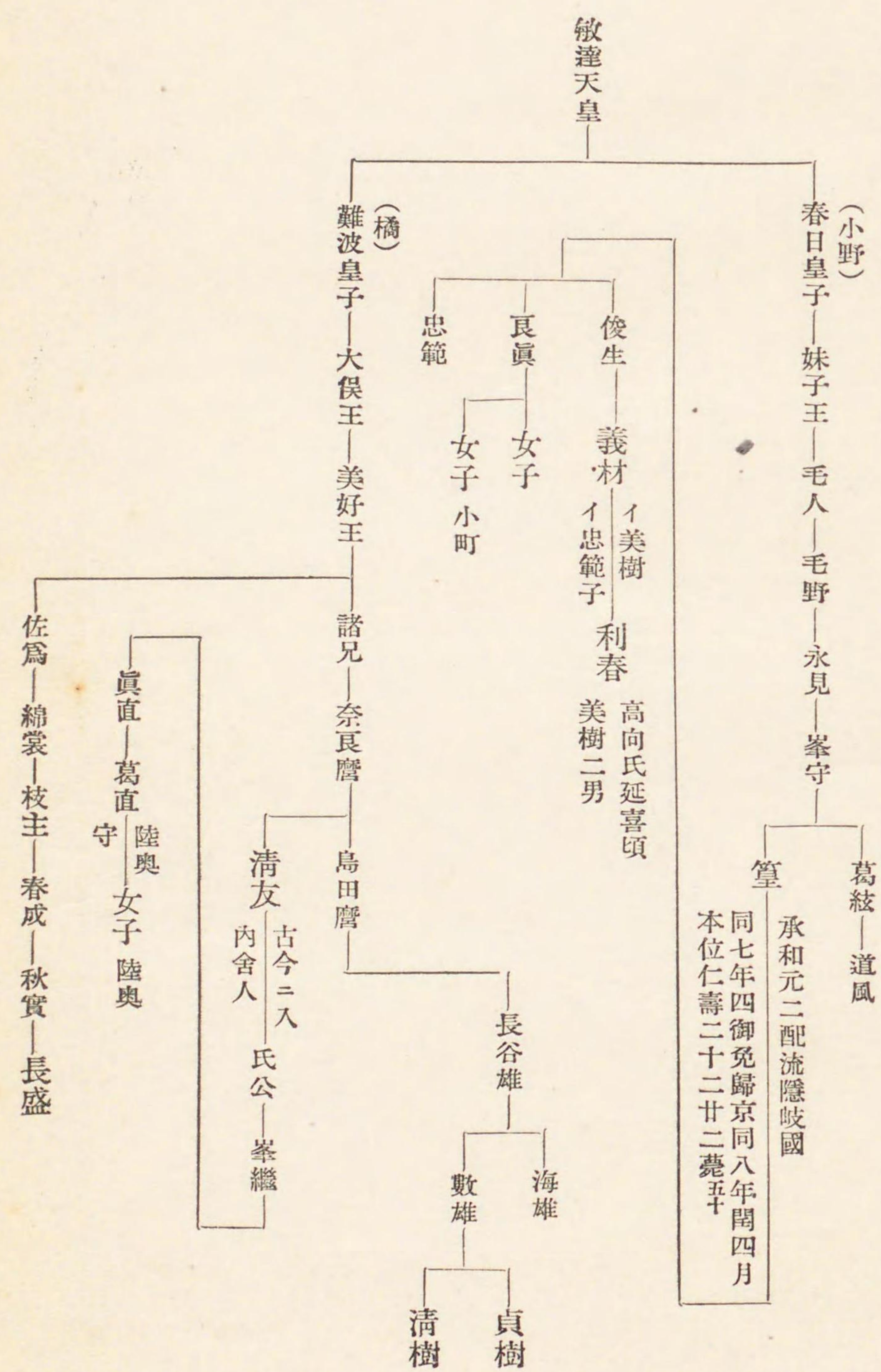


[二 圖 系]



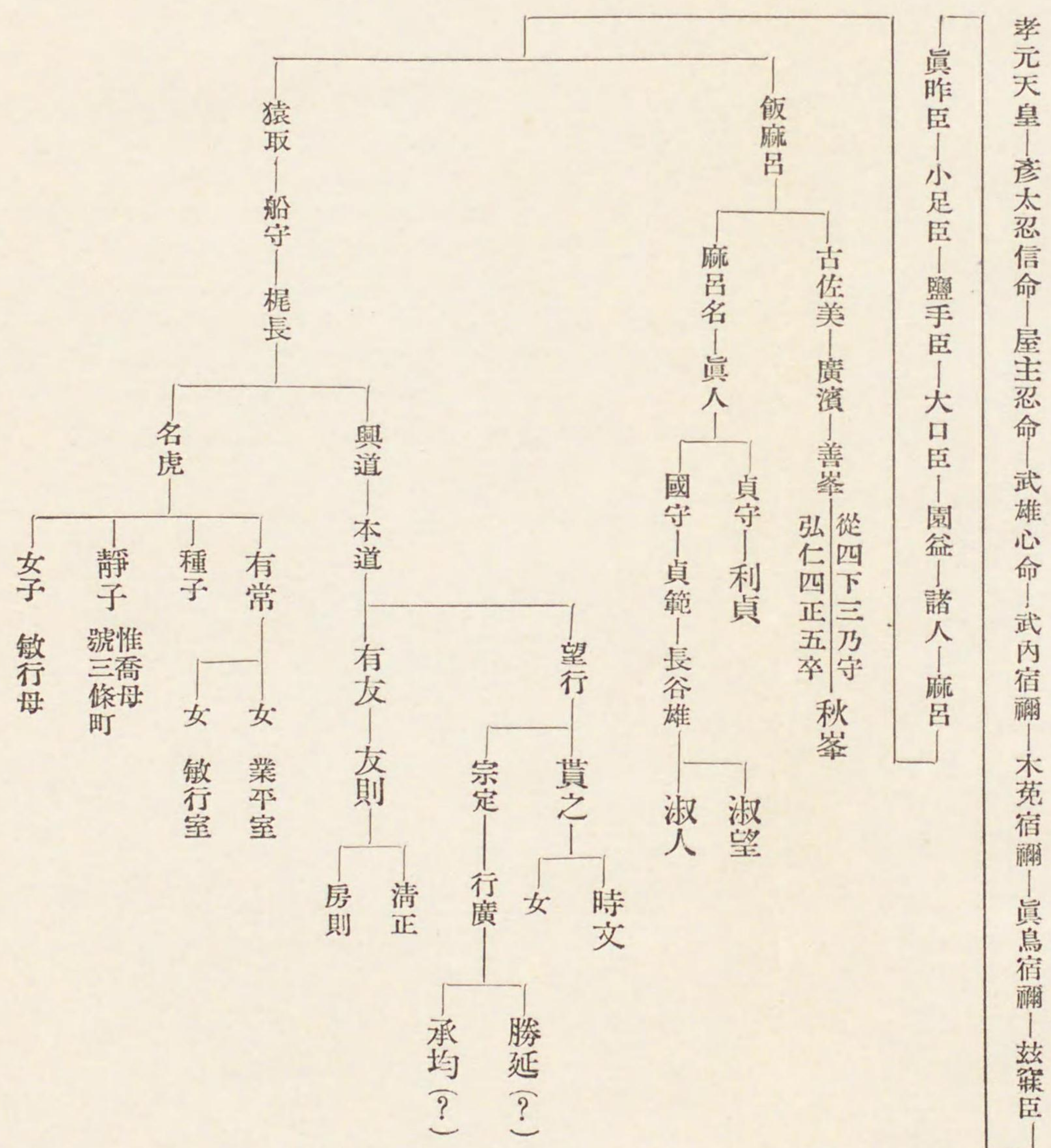


[四 圖 系]

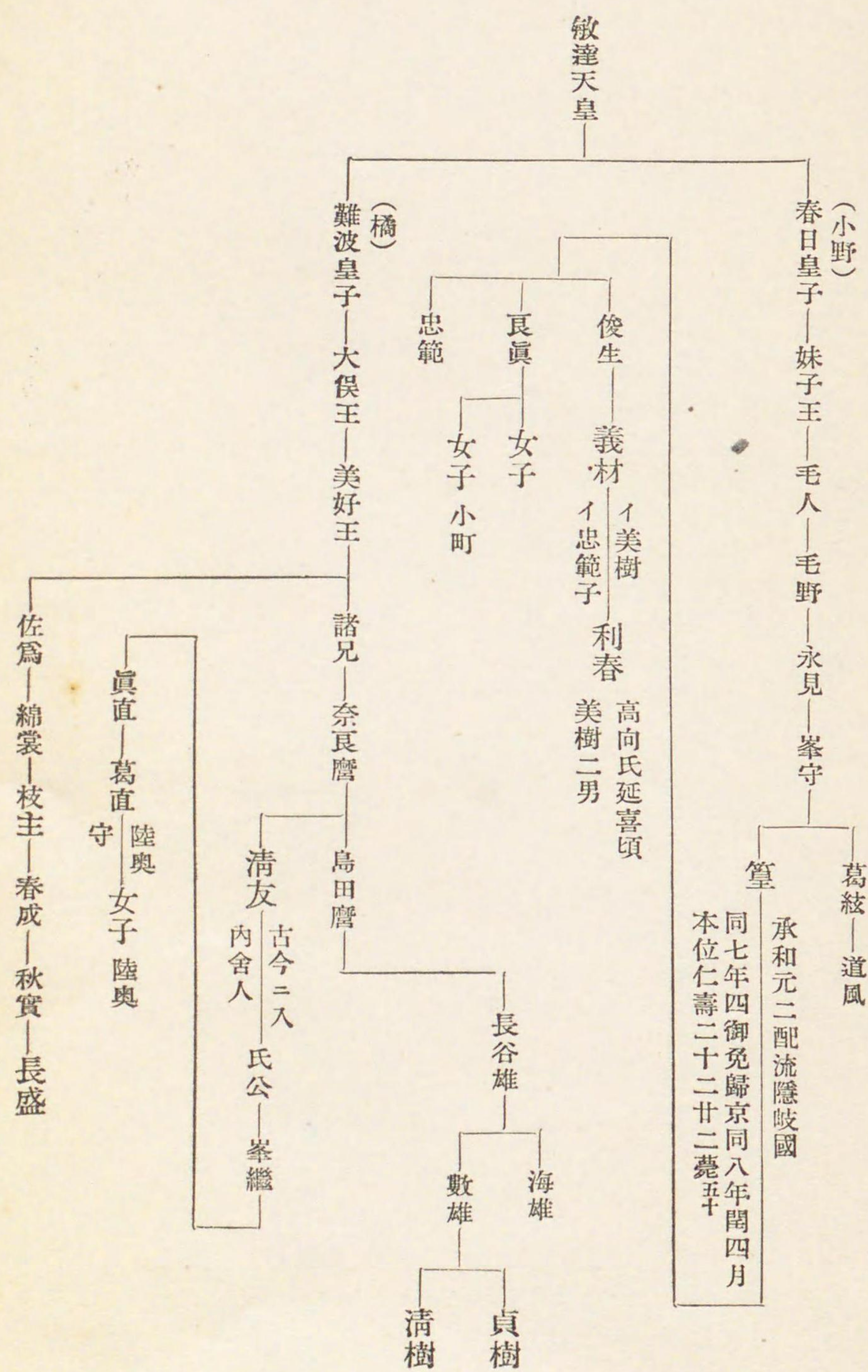




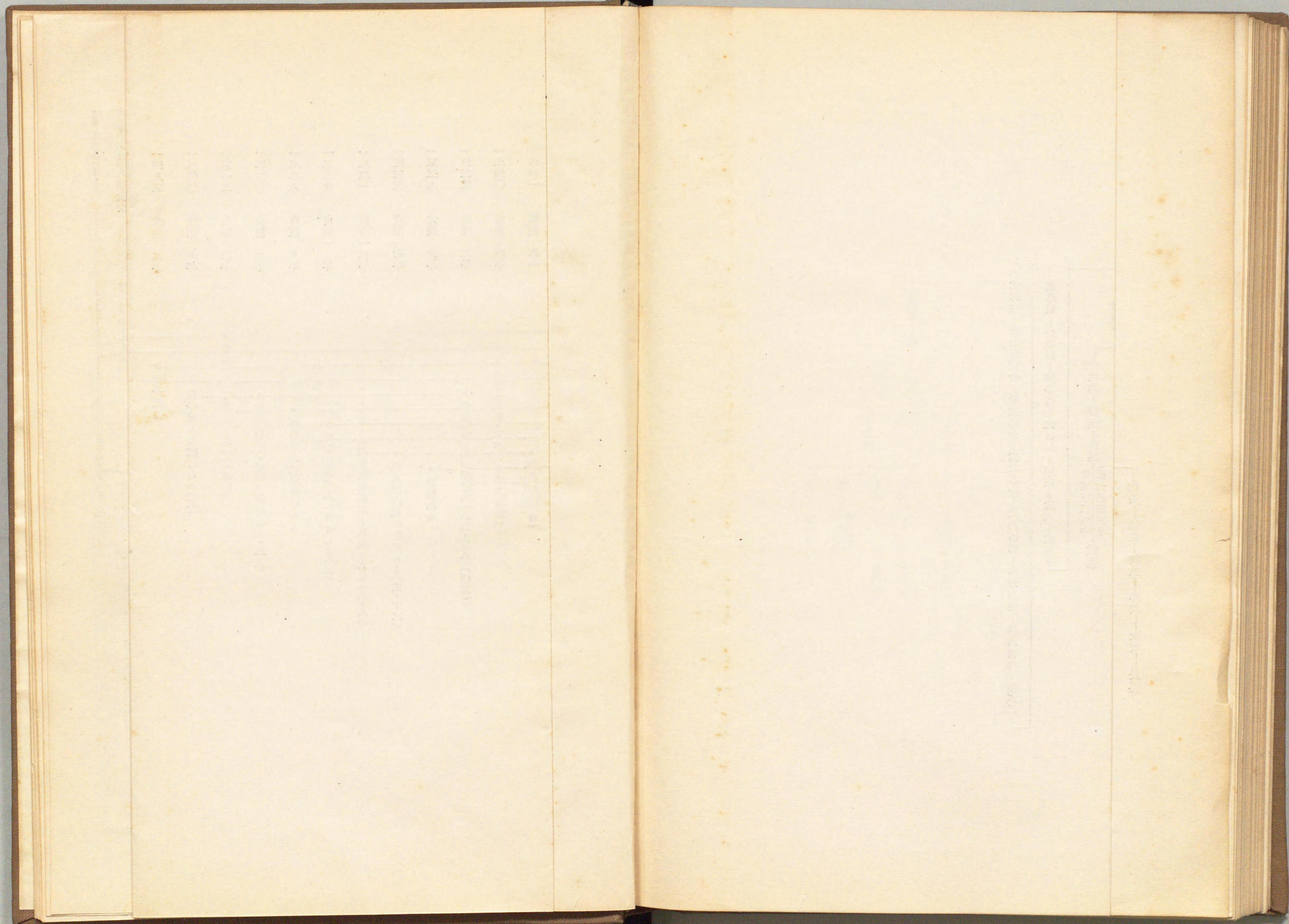
[三圖系]



[四圖系]



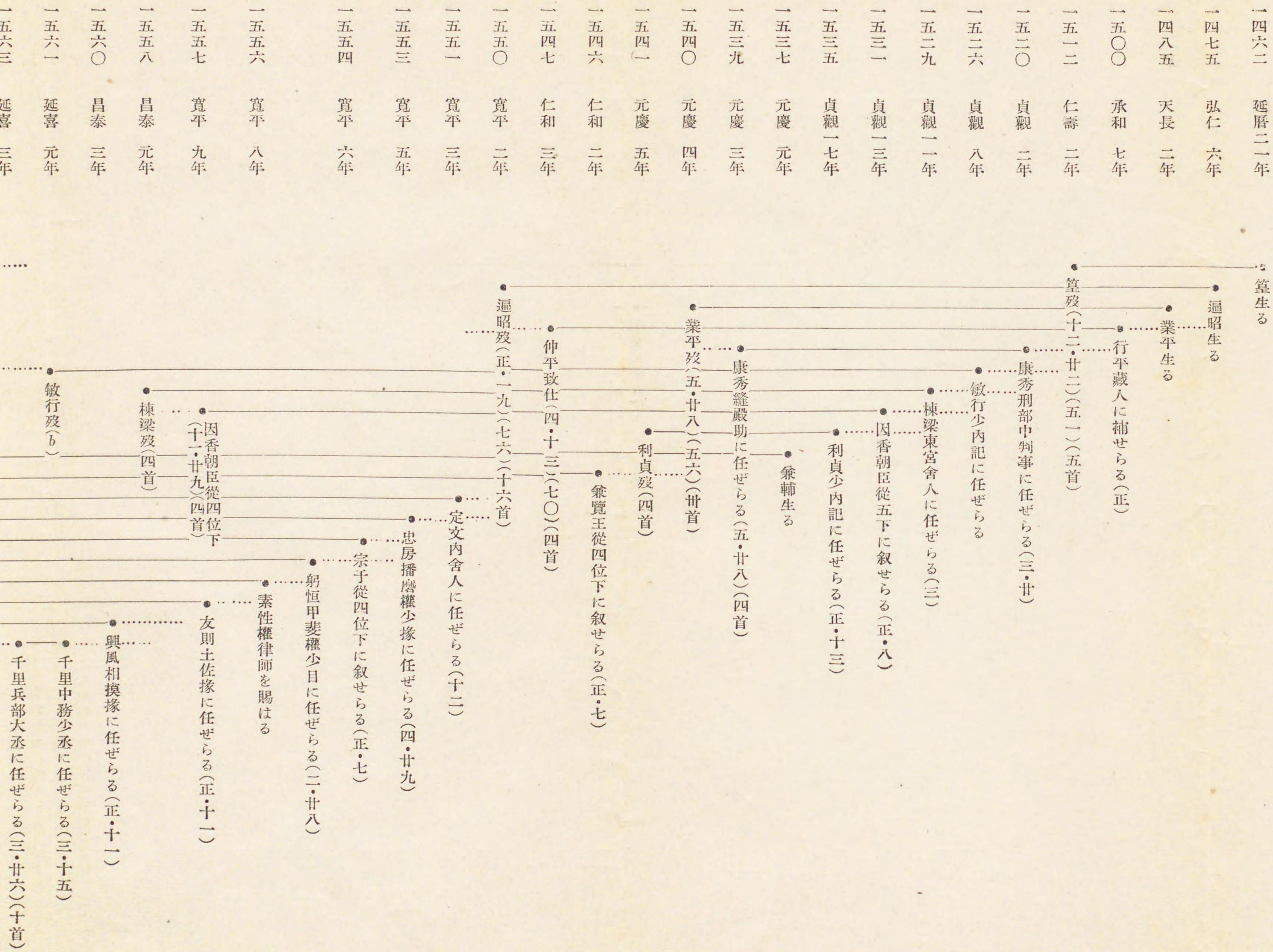






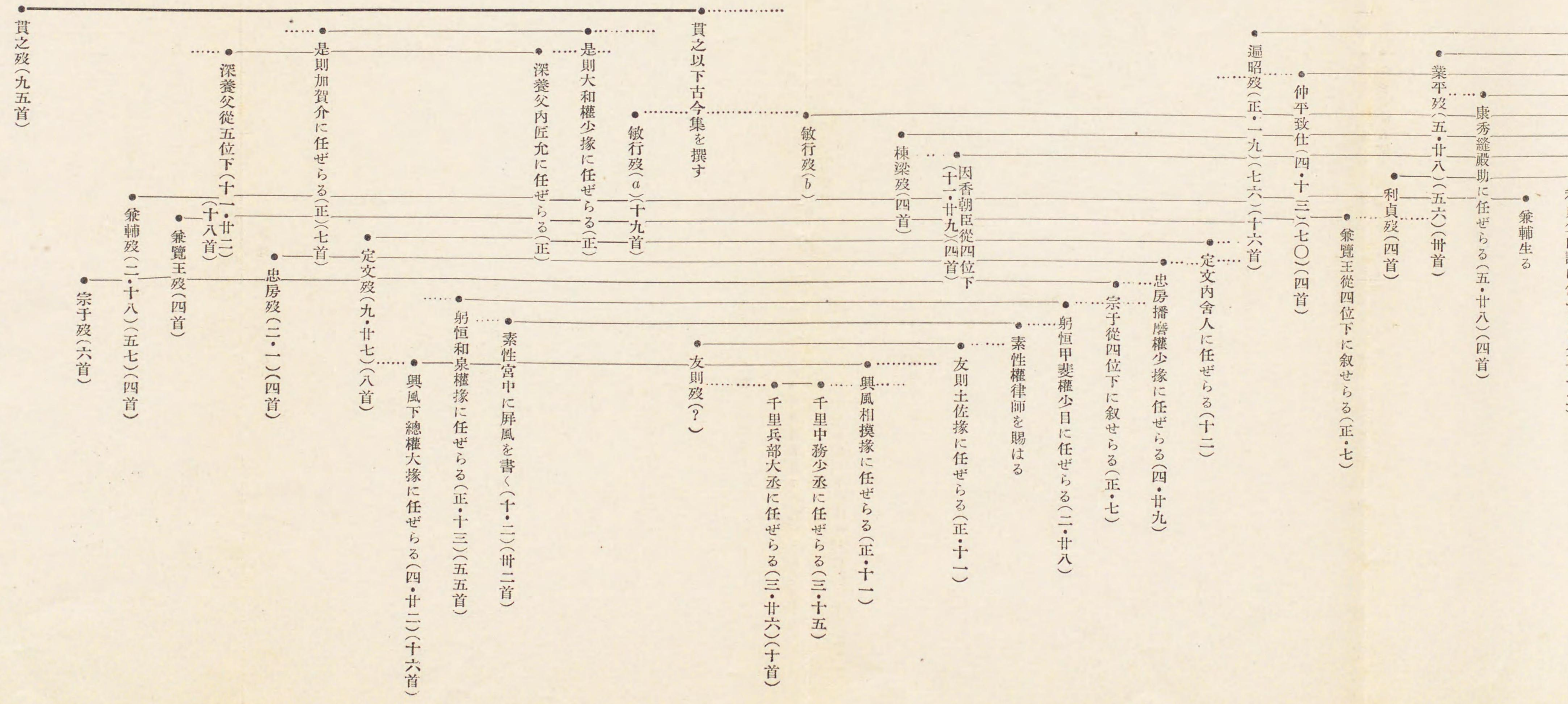
# 作者年表

四首以上の作者に就いてその生存年代の  
關係を表にして見ると左の如くである





一五三五 貞觀一七年  
 一五三七 元慶元年  
 一五三九 元慶三年  
 一五四〇 元慶四年  
 一五四一 元慶五年  
 一五四六 仁和二年  
 一五四七 仁和三年  
 一五五〇 寬平二年  
 一五五一 寬平三年  
 一五五三 寬平五年  
 一五五四 寬平六年  
 一五五六 寬平八年  
 一五五七 寬平九年  
 一五五八 昌泰元年  
 一五六〇 昌泰三年  
 一五六一 延喜元年  
 一五六三 延喜三年  
 延喜五年  
 一五六七 延喜七年  
 一五六八 延喜八年  
 一五六九 延喜九年  
 一五七一 延喜十一年  
 一五七四 延喜十四年  
 一五八三 延長元年  
 一五八四 延長二年  
 一五八八 延長六年  
 一五九〇 延長八年  
 一五九二 承平二年  
 一五九三 承平三年  
 一五九九 天慶二年  
 一六〇六 天慶九年



右の外に時代不明のもの

- 忠岑 三〇首
- 伊勢 二二首
- 小町 一八首
- 元方 一四首
- 滋春 六首
- 黒主 五首



昭和三年一月五日印刷  
昭和三年一月十日發行  
昭和五年四月十日七版發行

古今和歌集

定價金貳圓



編者	藤村作
發行者	東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地 佐藤正叟
印刷者	東京市京橋區銀座西二丁目三番地 高橋郁

(刷印社會式株刷印協三)

發行所

東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地  
振替口座東京二九五〇七番

至文堂

電話青山 三四五六番  
三四三番



東京帝國大學教授 文學博士 藤村作先生編

### 最新刊 頭古事記

定價 金貳圓  
送料 金拾錢

古事記は日本書紀・萬葉集と共に、日本上代の最も貴重な文獻の一つであつて、日本民族精神の結晶であり、國家的精神の強調されたものである。従つて日本人としては何人も必ず一讀しなければならぬ國典である。然るに從來最も廣く流布してゐる宣長の「古訓古事記」の本文中には、疑を挿むべき箇所がかなり多かつたが、今回藤村博士によつて古事記の古寫本の中で現存最古の完本なる國寶「眞福寺本」(名古屋市眞福寺、寶生院所藏)が、他の諸本との嚴密なる對校を経て世に現はれた。眞福寺本の價値は周く學界に認められ、これを底本とし、廣く諸本を校合して一の定本を作らねばならぬといふ事は、學界多年の欲求であつたが、それが今回實行せられたのは、誠に慶賀すべきことである。

一本書は飽くまで原本の形を存することに努め、他の諸本と精密に比較してその異同を一々明示した。  
一本文校訂によつて流布本の誤謬を正し得た。  
一訓み方は大體古訓本に準據したが、他本の訓を參酌して改めた。  
一日本書紀・風土記・祝詞・琴歌・萬葉集等に見えてゐる異傳及び歌謡の異同を頭に加へてゐるので、是等によつて古事記の足らざるを補ひ、是等との比較によつて古事記の特色を闡明し、同時に一目他書との關係を明瞭にすることが出来る。  
右の如き特色を有つ本書は、上代文學研究者の無二の伴侶であるばかりでなく、高等諸學校の教科書として最適のものであり、又一般國文學愛讀者に歡迎せらるべきものたるを疑はない。

東京帝國大學教授 文學博士 藤村作先生編

### 最新刊 校訂萬葉集

上 定價 金壹圓八拾錢  
下 定價 金壹圓  
送料 各金拾錢

現代に於ける萬葉集の解釋や訓は多く萬葉集古義によつたものであるがその後六十餘年間に於ける萬葉學の進歩は驚くべきものがあつて、不滿の點も多く誤の箇所も少くない。本書は此の缺陷を補ひ定本ともなるべき善本を提供して萬葉集に對する正しき理解を促進せんがために編纂されたものである。

一本書は寛永十年版本即ち所謂流布本を基とし平安朝以後の多くの古寫本及び諸註釋によつて校合し更に不滿の箇所は著者の私見によつて讀み改めた。尙他書並に私案によつて訂正した箇所は一々上欄に記した。  
一本書は理解に便にするため全體を假名交り文に書き改めその内著名の作及び萬葉假名の研究に必要な歌三百餘首を選び原文の儘で掲げその上欄に假名交り文に改めたものを載せた。尙歌の題詞・左註の文・漢詩・序文・純粹の散文・手紙・目錄・奥書等は研究者の便宜のため原文の儘で載せた。更に原文の儘で殘した所には返點・送假名を附し難語及び人名には讀假名を附した。  
一上欄には字・訓の校訂の他に紙面の許す限り語解や全譯を掲げた。一特に著名な歌、藝術的に勝れた歌には○印を附し全體を見る餘裕のない人や教科書として授業時間數に制限のある場合などに用ひるのに便宜にした。  
かくして本書は特殊研究者には定本とも見るべき貴重なものであり一般愛好者には至極簡便なものである。更に高等諸學校の教科書としては最適のものである。

東京帝國大學教授 文學博士 藤村作先生編

### 最新刊 頭清少納言枕草紙

定價 金貳圓  
普及版 金壹圓六拾錢  
送料 金八錢

清少納言の枕草子は、源氏物語と並び稱せらるゝ國文學史上の大作である。しかるにこれが傳本として從來一般に流布した春曙抄系統本は字句章段の錯謬脱少からず、本文解釋上甚だ遺憾の點が多かつたが、今回藤村文學博士によつて、枕草子諸本中最も正確なる本文を有する内閣文庫所藏の三卷古寫本が、他の諸本との嚴密なる校合を経て、現世に現れる事になつたのは、學界のため誠に慶賀すべきである。

(一)本書は貴重なる寫本の本文を一々正確精密に比較校合し、その異同を列舉して明示した。  
(二)本書は從來の誤れる註釋を破り、最も新しく最も正しく、かつ最も精細なる解釋をその頭に加へた。ことに本文校定によつて、前人未言の新説を示し得た。  
(三)本書は有職、故實、家屋、宮殿、調度、服裝等に亘りて圖解し、全卷を一大圖畫たらしめた。  
本書の原本たる三卷本枕草子は、枝直、千蔭、弘賢、高尙、春村等をはじめ、近世諸家の等しく秘して傳寫校合した貴重なる傳本である。敢て諸家の精讀をまつ。

東京帝國大學教授 文學博士 藤村作先生編

### 最新刊 頭平家物語

定價 金參圓貳拾錢  
送料 金拾八錢

「平家物語」の名稱は、我が國民にとりて餘りに親しい。祇園精舎の起筆から女院御往生に至るまでの一篇十三卷百九十章こそは、實に鎌倉時代の軍記物語の隨一であつて、好箇の史籍であると同時に、悲また不朽の一大叙事詩篇である。蓋し大小幾多の合戦を経とし、悲しき戀物語を織りこみ、此の間に挿むに和漢の物語の數々を以てし、また有職故實を始めとし、馬・物の具に至るまで類を盡してゐる。さながら當時の世相の縮圖である。之に加ふるに和歌あり朗詠あり今樣ありて、隨所に嬌々の餘韻を聴くことが出来る。かくて全篇を一貫し光被してゐるものは、何と云つても佛者の梵音であり、佛陀の慧光であらう。誠に高き賤しき、戦も戀も、音聲も文學も、一切がこゝに歸向して、一篇無韻の散文詩を形づくつてゐるとも謂へよう。

思ふに本物語の説話が、或は其の後の軍記諸篇に、或は諸曲にお伽草子に、また浮瑠璃に脚本に、多くの題材を提供してゐる一事に徴しても、平家一篇が數百年の永きに亘りて、如何に我が國民に親しまれつゝ、今日に至つたかを推察するに難くない。  
本書は最も弘く流布し來つた萬治版本を底本として、之に左の諸點を注意しつゝ、校訂を試みたのである。  
一 片假名は凡て之を平假名に改め漢文を國文に書きかへた事を保つた。  
一 當字・慣用句等にして、其の語感・情調を味ふべきものは之を保つた。  
一 振假名は讀誦上、必要なものみに止めた。  
一 頭註は、本文の校訂に譲らぬ程度に努力を傾注してゐる。  
一 本文中の語句・説話等の出典を可及的に探求した事。  
一 史實を參照したのは、本物語の創作の跡を辿りたいが爲めであつた事。  
一 人物・器物及び行事、または其れ等に關する叙述に就いても、諸書を照合して考證に努めた事。  
一 引用の語句は、凡て原據のまゝを載せ且つ書名をも併記したの事。  
一 將來の研究の便を計る爲めであつた事。  
尙又平家物語研究上に、編者會心の新発見も少くない。敢て専門研究家の批正を待ち、一般の「平家」愛讀者の精讀を望むものである。



東京帝國大學教授 文學博士 藤村作先生編

### 最新刊 頭古今和歌集

定價金 貳圓  
送料金 八錢

古今集は歌の王國平安朝に於ける一大歌集であることはいふまでもなく、その後の日本文學は殆どその影響を蒙らないものはない。古今集を見ずして平安朝の歌を知ることは出来ず、古今集を知らずして如何なる日本文學の註釋書も十分に理解することが出来ないであらう。この古今集に就て正しき知識を得る前提として先づ正しき古今集を知る必要がある。

現代最も廣く流布せられてゐる古今集は八代集に收められた定家の貞應本である。併しこの貞應本に善き古寫本のあることを知る者は流布本に就き疑惑を挿まざるには居られない。その上同じ定家本であつても傳來の異なる嘉祿本とこの貞應本との關係、更に定家本と清輔本との異同、最近有名になつた元永本及び同系統に立つ筋切と定家との異同如何などの問題は、大いに研究を要する所である。

本書は以上の問題を前提として編纂せられたもので、貞應本の中最も古き寫本と考へられた頼阿自筆本(宮内省圖書寮所藏)を底本とし、貞應本と姉妹關係にある嘉祿本(東京帝國大學所藏)・定家本に先行する俊成本の系統と考へられる傳爲家筆本(靜嘉堂文庫所藏)・定家本と從兄弟の關係にある清輔本二本(靜嘉堂文庫所藏)などを以て校合し、更にこれらの諸本に對して異本の位置に立つと考へられる元永本、傳佐理筆の筋切、傳行成筆切、傳俊頼筆の序、傳貫之筆の高野切などを參照し、各本の間における語句の異同は勿論、歌首の増減なども一々明瞭に指摘した。且つ本書には適當なる頭註を試み特に古今集中必讀の歌二百首に印を附した。本書は實に以上に擧げた諸書を一系の下に集大成したものであつて一般の愛好者に對しては勿論特殊研究者にとつても至極簡便で有益な編著であり、更に高等諸學校の教科書としても最適のものである。

東京帝國大學教授 文學博士 藤村作先生編

### 最新刊 頭新古今和歌集

定價 金貳圓  
送料 金八錢

古く和歌の調の特異なるものを擧げて、萬葉・古今・新古今の三つを説いてゐる。この三者は和歌觀に或る固定したものの存した時代、換言すれば、自らの言葉もて自らの詩境を歌へと説いた近世の和歌觀に至るまでは、多少とも常に對立的に思惟されてゐた。この内、萬葉古今の二集に對しては古來許多の研究や註釋を有するけれども、新古今集に就いては其等の存するもの少く、また流布本にもとづく從來の研究は主として辭句の末に止まり、定家の明月記や、家長日記に示された撰者等の異常な努力による勞作であることを、本文に就いて研究し得ることが少なかつた。然るに流布本とは異なる隱岐本の出現は、この新古今集の根本的な研究の上に、新なる光明を放つたものである。

本書は、この隱岐本の一であつて、宮内省圖書寮藏にかかる烏丸光榮自筆寫本を底本とし、次のやうな點に注意して編まれたものである。

- 一、烏丸本は其の奥書によると定家自筆本、家隆自筆本を參校した古傳本の寫本であつて、其考異その他の點に、研究上極めて貴重なものが存してゐる。本書は其をそのまゝ採記した。従つて、所謂「新古今切つぎ」のあとを如實に見ることも出来るやうになつた。
- 一、集所載の歌で、萬葉集、古い歌物語、家集、歌合等に出でたるものは、一一これを原本と對校し、其旨を頭註に記した。これは新古今集成立についての研究上に、相當の手がかりともならうと思ふ。
- 一、頭註には本歌、引歌を主として記した。また流布本との相違點をも、こゝに示した。

最近、三矢・武田・折口の三氏によつて隱岐本新古今和歌集の出版があつて本書に關する研究が新しく擡頭して來た時にあたり、底本を異にした本書の出づることも意義あることであらう。

東京帝國大學教授 文學博士 藤村作先生編

### 最新刊 頭徒然草

定價金 貳圓  
送料金 拾錢

兼好法師の徒然草は、枕草子と並び稱せらるゝ隨筆文學史上の傑作である。如何に廣く愛讀され深く研究されてゐるかは、これが註釋書・教科書の所謂汗牛充棟の續出を見ることによつて明かである。然るに今日迄の流布の諸書は、定本の研究・註釋の正確等に遺憾の點が少くない。且つ教科書としては、教授及び學習上の實際的効果に關する考慮が乏しいと思はれる點が極めて多い。

本書は上述の諸問題に留意して、次の様な態度方針で編纂せられたものである。

- 一、宮内省圖書寮所藏の黃門烏丸光廣の校訂にかゝる慶長本を底本として、別に古寫本古版本數種(桂宮本、松會齋本、正徳本、元文本、弘賢本等)と、古版の註釋書(野槌、文段抄、參考、諸抄大成等)とを以つて嚴密に本文を校合し、異同を一々綿密に列擧して明示した。
  - 二、中世文學一般の古典崇拜の傾向と兼好の思想上の特質とに鑑みて、本文に關係ある事項・引用の語句・固有名詞等はすべて頭註として精細なる解説を掲載した。また從來の註釋の誤謬をも訂正して置いた。
  - 三、巻頭卷尾には十數葉の研究資料を附録とし、更に從來の諸書よりも適切な圖繪を多數に挿入し、別に兼好法師集等をも添加して、本文の理解鑑賞上に愜みなきを期した。
- 斯くの如き特色を持つ本書は、本文研究其他の専門的知識に關して特殊研究者の爲めに、また諸註釋書の要領を得たる集大成といふ點からは一般愛讀者の爲めに、貢獻し歓迎せらるべきものたるを疑はない。猶、教科書用としては細心の用意を充分にいたせる點に於いて高等諸學校程度の教科書として、最も諸條件を具備した適當のものたることを信ずる。敢て江湖の愛讀と諸校教授各位の採用をまつ。

東京帝國大學教授 文學博士 藤村作先生編

### 最新刊 頭俳文學集

定價金 貳圓五拾錢  
送料金 拾四錢

芭蕉が、滑稽遊戯の俳諧を捨て、「さび」の文學としての俳諧を樹て、から、俳文學の上には著しい展開があつた。同じ蕉風の流れに棹しながらも、時代の風潮と天才の個性とは其の作品の上に自ら異なる人生觀自然觀藝術觀等を表現した。さうした俳文學の全般に亘つて、其の精粹とも見るべき諸作を一系の上に集めたものが本書である。收むるところ「奥の細道」「猿蓑集」「續明烏集」「新花摘」「うづら衣」「おらが春」の六篇。奥の細道は酒竹文庫所藏の素龍清書本最古版を底本とし、猿蓑集は同文庫所藏の元祿古板本に據り、續明烏集は從來の蕪村七部集によらず、特に請うて露石文庫所藏の原本によつた。新花摘は酒竹文庫所藏の初板本をもととし、うづら衣は帝國圖書館所藏の三冊本を、おらが春は酒竹文庫所藏の嘉永本を底本とし、それら確實なる諸書によつて校合した。

- 一、本書の校訂は、つとめて原本の形を存することに留意し、抄本を作らず全本を採録した。また原本に挿圖あるものは、これを寫眞版として原本挿入の箇處に收めた。
  - 二、本書は、從來註釋書の少かつた俳文俳句連句等には、最も精細正確なる頭註を加へることにつとめた。
  - 三、本書は、適切な地圖・寫眞・繪畫等を挿入し、本文理解の上にも多くの便宜を圖つたのみならず、また俳文學の趣味を添へることに留意した。
- かくて本書を讀むことによつて、俳文學の諸高峯を究め得ると共に、その史的展開をも鳥瞰することができると信じられる。一般研究者にとつて至便の編著であると共に、また高等學校の教科書として最も適當なものである。



東京帝國大學國文學研究室編輯 國文學研究叢書第一編  
東京帝國大學助教授 文學士 久松潜一先生著

最新刊 萬葉集の新研究

定價 參圓五拾錢  
送料 金拾貳錢

本書一度出でて萬葉研究に一段の精彩を増したことは明かに本書の價值を證するに足るもので、幸に學界注目焦點に立ち版を重ねること八回、今や増訂版を出すまでに至つた。

本書の内容は萬葉集を全體として人と作品間を流れる抒情的精神を檢討し、人聲、赤人、憶良、旅人、家持、蟲麿等を始め、歌人、民衆歌人を對象としてその詩形、神人の思想、古代傳説、現代生活等を考察し記紀の歌を概観して萬葉集を産出する過程を眺めると共に萬葉派の歌人を説いて萬葉集の歴史的意義を究め、更に萬葉集の成立、その研究の發達、批評の變遷を見て基礎的研究を試みるなど、萬葉集に造詣深い著者が從來の成説に捉はれず自由なる批評的態度を取つて根本的に研究した多年の成果である。かくして今や舊版に増訂追記を試みると共に萬葉集批評の變遷の一章を補つて錦上更に花を添へたる觀がある。

東京帝國大學國文學研究室編輯 國文學研究叢書第二編  
朝鮮帝國大學助教授 文學士 麻生磯次先生著

近世生活と國文學

定價 參圓五拾錢  
送料 金拾四錢

從來の特權階級の文學は徳川期に入つて全く一般民衆の手中に渡つた。伸ぶべくして久しく伸び得なかつた鬱勃たる民衆の氣概は、一度因襲の手より脱するや俄然として自らの生活の樹立に赴いたかくして止むに止まれぬ民衆の姿態は、やがて徳川期の文學を生んだ本書はこの生々とした實生活の姿態と、その切實に表現せられた文學との交渉を深く内面本質に立入つて如實に見んとしたものである。一全體として文學を生活の表現として考へ同時に生活の諸相を通して文學的現象の特質を見ようとした。一浮世草紙、淨瑠璃本、酒落本、滑稽本等を展開の姿の下に考へ、これが世相との交渉を見ようとした。一武士及び町人、生活、遊里生活、俳諧生活、諧謔生活等の諸相を眺めその特質を考へた。一武士と素町人、遊女と地女、行脚僧と遊治郎の對立に時代の特殊な姿を認め義理、人情、粹、通、わび、さび、機智、諷刺等の興味ある事柄に就て述べた。一階級的意識を考慮して時代精神の特性を解剖し生活展開の理法を見ようとした。著者は新進篤學の士、その多年の研究によつて複雑多様な徳川文學の中心基調をなす種々相を捉へて前人未踏の境地を開拓し、よく民衆生活の全野を展開してゐる。徳川時代の文學、世相の特質を知らんとする人には無二の伴侶であり、更に現代の生活、當來の文學に興味を有する人々には多大の暗示を含んでゐる。

目次

第一章 總論	一、平民文學と世相 二、形式と儀禮 三、施政の要旨
第二章 武士と町人	一、武士の屬性 二、武士の歌化 三、町人生活
第三章 遊里中心の生活	一、女性の地位 二、傾城氣質
第四章 俳諧生活の基調	一、俳諧生活の基調 二、蕉風の由來 三、芭蕉の生活 四、俳諧生活の基調
第五章 可笑味の性質と諧謔生活	一、可笑味の性質 二、諧謔生活
第六章 滑稽の可笑味	一、滑稽の可笑味 二、滑稽の可笑味
第七章 機智の性質と諷刺生活	一、機智の性質 二、諷刺生活
第八章 生活の諸相	一、生活の諸相 二、生活の諸相
第九章 生活の餘瀝	一、生活の餘瀝 二、生活の餘瀝

東京帝國大學國文學研究室編輯 國文學研究叢書第三編  
大阪女子專門學校教授 文學士 兒山信一先生著

日本詩歌の體系

定價 參圓五拾錢  
送料 金拾四錢

和歌、俳句、俗曲、民謡などの日本詩歌は國文學史上の花である。そしてこれ等は其の最に於て各時代を通じて極めて重要な地位を占めてゐる。實際國文學の研究はその大半をこれ等詩歌の研究に俟つべきものであらう。しかも從來の研究は單なるその部分的研究の外に出でず表面皮相の研究に止つてゐる。本書はこの點に憚らずして著者が多年の蘊蓄を傾倒し日本詩歌の全野に亘り極めて複雑多様な内面本質に立入つてこれを組織立て體系つけたものである。

一和歌、連俳より唱歌、俗曲、民謡等に至るまであらゆる種類の詩歌を對象とし、説經、祭文、鉢叩、讚美歌、歌劇などをも一々網羅した。

一日本詩歌の歴史的開展を跡づけたものではあるが、單なる表面に表はれた歴史的事實よりも寧ろその根柢に横はる存在理由を重んじながらその發展を系統的に敘述した。即ち日本詩歌が如何にして發生し分化したか、又それが如何にして發達興隆し何か故に衰滅萎縮したか、更に將來如何に發展しゆくべきか等の問題を解決しようとした。これによつて日本詩歌の發生、發達、變遷、衰滅の根本理由を闡明した。

一詩歌そのものに對する正しい理解を有し確實な根據の上に立ち科學的方法によつて整理した。日本詩歌は國民と共に存し國民と共に榮えるものである。本書はその歴史的根據の上に立つて日本詩歌の新生面を開展すると共に更に新しい問題を掘唱したものである。日本詩歌の研究者は勿論一般國文學愛好者に絶好の著書であるばかりでなく荷くも廣く詩歌に思ひを寄せ興味を有する人々には多大の暗示を齎すものである。

東京帝國大學國文學研究室編輯 國文學研究叢書第四編  
文學士 手塚昇先生著

源氏物語の新研究

定價 參圓參拾錢  
送料 金拾四錢

源氏物語出て、九百餘年、常に國文學上の一異彩であるばかりでなく全世界に於ける最古の小説の一として、しかもあの時代に人情展開の過程を寫した物語として、その組織に於てその敘述に於てかくまでに完備したものを見たのは、正に世界文壇の一大驚異である。

吾々は祖先の中にかゝる偉大な文學を有することを誇りとし又心強く思ふものである。かくして源氏物語一度出でて國文學の主流は全くその跡を追つて展開したとも見られる。されば源氏物語の研究は古くより行はれ現に年々殆ど大同小異の註釋書が續々刊行されてゐるのであるが、何れも先人の舊説を繼承墨守したるもののみにて、その評論考證に關する總論的方面の研究に至つては見るべきものが甚だ少ない。著者は新進篤學の士こゝに見る所あり多年研究の結果遂に本書をなすに至つた。實に本書は過去五百年の源氏物語に關する評論考證の研究史を背景とし、而も創作に志す著者が當然の歸結として作家的見地より深く原作者の創作心理に立入つて研究評論したもので、過去の成説に捉はれず幾多新説を出した源氏物語研究史の最新線に立つものである。



東京帝國大學國文學研究室編輯 國文學研究叢書第五編  
府立 高等學校教授 文學士 片岡良一先生著

### 忽三版 井原西鶴

定價金參圓五拾錢  
送料 拾四錢

今若し元祿時代を知らうと思ふならば先づ西鶴の描いた所を見るがよい。實に西鶴は元祿時代の先頭に立つて、これを最も明白に最も大膽に、最も具體的に最も鋭く描いてゐるので、此の時代の生活の實際と趣味の根柢とを遺憾なく寫してゐる。一日に二萬三千五百句の放れ業に世人を驚倒せしめたのも西鶴である。一代の文人と俗流者とより等しく讃仰の言葉を博したのも西鶴である。こゝに西鶴のはかり知られぬ偉大さと複雑さがある。本書は西鶴の此の偉大さと複雑さとの全面容を見盡さうと企てた。即ち人、俳諧、浮世草子、淨瑠璃などを始めその他一切の餘技を通じて西鶴の眞實のあらゆる斷面に觸れようとして試みたものである。西鶴の本體を見究めようとするには、内から其の心境の推移や創作心理に深い探りを入れると共に、外から元祿の時代思潮と時代生活とに觸れる必要がある。そこで時代の環境を明瞭にすることによつて、西鶴の相を鮮明に浮び上げようとして試みた。かくて著者の犀利なる觀察と多年の研究との結果は、本書に於て明かに西鶴の全面を蘇生せしめた觀がある。

東京帝國大學國文學研究室編輯 國文學研究叢書第六編  
東京帝國大學教授 文學士 湯池孝先生著

### 最新刊 樋口一葉論

定價金參圓五拾錢  
送料 拾四錢

從來の觀念小説に嫌らずして新に心理描寫主觀描寫の旗幟を擁して佳作連出盛名を一時に愆にしたのは樋口一葉である。一葉の文壇に於ける活動は明治二十五年より其二十五歳にして病没するまで僅に四年。其間作る處二十數篇。本書は此等不朽の名作を通して一葉の全面容を知らんとするものである。

一 歸納的態度によつて各方面からの探求を綜合し一葉文學の輪廓と内容を新に組織立てることに論斷の主意を置いた。

一 一葉文學の背景をなした時代の趨勢特に寫實の風潮並に其次期への推移に留意し明治文學の中樞と一葉の過度期的文學との交渉を明かにしようとした。

一 努めて創作の心理に立入り其實生活から作品への過程消息を明かにしようとした。

一 一葉文學の史的價值を闡明するに其文學的價值を探り味の文學たることを強調した。

明治文壇に天才一葉を出したことは吾等の誇である。而も一葉に就て見るべき研究のないのは吾等の大なる恥辱である。著者は新文學に就て造詣深い篤學の士、殊に一葉を研究すること多年。本書は實に著者が苦心の結果を世に問はんとするもので、當時の文學界の雰囲気並に水準を十分に考察して傳統的先入見を脱し一葉の眞面目を生かしてゐる。

東京帝國大學國文學研究室編輯 國文學研究叢書第七編  
東京帝國大學國文學研究室 文學士 池田龜鑑先生著

### 最新刊 宮廷女流日記文學

價金參圓五拾錢  
送料 金拾四錢

王朝時代に於ける幾多の閑秀作家の筆になつた日記文學は國文學史上に於て特異の地位を占有するものであり同時に又獨自の文學世界を展開して極めて藝術的價值の高いものである。而も此等に對する研究考察は從來全く閑却せられてゐたのである。本書は茲に見る所あり、此の内親的乃至哲學的ともいふべき一系列の文藝を主題として正當なる文學的地位を要求し晴朗澄徹なる批判及び鑑賞を試みて、その眞意義を闡明したのである。

一、本書は著者が過去六年間各地を歴遊し各種の文庫及び諸家に秘藏せらるゝ門外不出の珍籍を渉獵し諸種の異本を精密に比較校合して本文を制定し古註を検討し前人未言の新解を施し精細なる索引を作り「宮廷女流日記考」無慮一萬八千枚の原稿を整理し此の驚くべき基礎的作業の上に漸く完成したる批評的鑑賞的考察である。

二、本書は日記文學及びその作者を知的に説明せんとするよりも寧ろ人間的に味得せんとしたものである。従つて王朝女性の模寫の姿態を外面的に解剖分析したものでなくその間に現はれたる久遠の女性の輝かしき不朽の光彩を直に凝視したものである。

著者は新進篤學の士最近東大國文學科が生んだ秀才である。現時の國文學界に於ける混濁枯渴せる詮索的論文に據らずして近代的理知と抒情詩的熱情とを交錯して織り出した美はしい藝術的評論である。實に本書は日記文學の研究としては我が學界に於ける最初の企であり殆ど唯一の業績であつてその透徹せる判斷と明確なる論究と清澄なる鑑賞とは全く他の企及し得ざる所である。

東京帝國大學國文學研究室編輯 國文學研究叢書第八編  
大西貞治先生著

### 最新刊 古代純日本思想

定價金參圓五拾錢  
送料 金拾四錢

本書は古事記並に萬葉集を中心としその他の文獻の助けをかり國初より奈良朝末に至る所謂精神的創造生活時代、國民生活自覺時代、國民生活激動時代に亘り専ら古代日本人の精神生活を對照として純眞な國民思想を研究したものである。即ち古代文藝に見えた純眞な國民思想の本質が外來の儒佛思想によつて如何に影響せられ訓練せられたか、これが奈良朝に入つて如何なる形質をとつたか、更に儒佛思想が國民思想の上如何なる痕跡を残してゐるか、この間に於ける思想界の狀態はどんなであつたか。かういふ問題を極めて思想的に内面本質的に説明しようとするのが本書の主眼である。

一、古事記を以て古代日本の哲學と觀じたこと。

一、萬葉集を一般思想界の狀態から専ら思想的に觀じたこと。

一、古事記に具現せられた國民生活と萬葉集に表現せられた國民思想とが本質的に脈々相通するものであると觀じたこと。

從來に於て絶えて見なかつたこれ等の新見地に立ちその内容が導くがまゝに深く内面の精神生活の殿堂に參入し著者自身の限りなき要求に應じて自由に觀じ自由に考へ新に見出した眞實相を具體的に描き出さうとしたのが本書である。古代の國民思想も現在の要求に應じて新に書き替へられなければならぬ筈である。かくして著者は十餘年研鑽の成果を以て世に問はんとするのである。古代思想は本書に於て初て不變の價值と永遠の若きとを得茲に新生命を以て全く蘇生したかの觀がある。而も之によく思想的體形を與へた所に著者の獨創力の深さと隠れたる世界に浸透して行く力の強さを見出すと共に、國文學研究に於て嚆矢を開き得る少壯有爲の士である。この隠れたる篤學者を世に紹介することを得たのは弊堂の喜びである。請ふ先づ本書について見られよ。



東京帝國大學國文學研究室編輯 國文學研究叢書第九編  
武藏高等學校教授 文學士 倉野憲司先生著

### 最新刊 古事記の新研究

定價金三圓五十錢  
送料金拾四錢

古事記は日本上代に於ける最も重要な文獻であつて、日本文學の源泉として、國民思想の搖籃として又古代の國民生活を活寫したものと、古代の日本を知る殆ど唯一の寶典である。而も從來の古事記研究は多くその註釋の範圍を出でなかつた。本書は、この點に據らずして深くその内容本質に立入り、全く著者独自の見解によつて根本的に研究論明したものである。

一古事記を上代に於ける民族的敘事文學と觀じ、その成立・内容及び形式に亘つて民族的敘事詩の本質的研究を經とし、言語・神話・宗教・人類・考古・土俗・歴史・民族・心理等の各方面よりの科學的研究を緯としたものであること。

一古事記研究の發達を眺めてその基礎的研究にも觸れたこと。

一古事記の素材をなす神話・傳説及び説話の比較評議を試みたこと。

一古事記に具現せられた上代の國民思想及び國民生活を闡明せんとしたこと。

本書は以上の新見地に立ち著者が多年の蘊蓄を傾倒して複雑多様な古事記の内容本質に立入つて之を組織立て系統づけたもので、明かに古事記研究に一新生面を開拓したものである。その科學的研究を試みた最初のものである。實に本書に於て古事記の眞意義は始めて闡明せられた概がある。

東京帝國大學教授 文學博士 藤村作先生著

### 五版 上方文學と江戸文學

定價金貳圓八拾錢  
送料金拾貳錢

徳川期の文學は國文學中の花である。浪華から江戸へ、元祿から文化文政へ、藝術の花は移り移つてとりどりの色を見せた。近松や西鶴や芭蕉や種彦やその他の所謂戯作者流。淨瑠璃や、淨世草子や、俳諧や洒落本などの所謂俗文學、是等の作者と作物とは吾が徳川期の文學を飾るものであり、同時に國文學中に重きをなすものである。

本書は徳川文學の研究に於いて現代の第一人者たる藤村博士が興味ある題目を捉へて元祿江戸の文學を平明に論述したるもの、特權階級の手から民族の手に渡された徳川文學の消息、「粹」と云ひ「通」と稱する當時の町人生活の真相を知るには絶好の資料である。元祿趣味を愛し、江戸趣味を喜ぶ人の爲めに無二の同伴たることは云ふまでもない。

東京帝國大學助教授 久松潜一先生著

### 最新刊

# 上代日本文學の研究

定價金參圓八拾錢  
送料金拾四錢

本書は著者が過去年間に亘り主として古代文學に關する研究論文を集めたもので、題材は廣く上代中古近世の各文學に取り蘊蓄を傾けて、その精神内容及び形態等に就て論究したものである。

先づ「國文學を流れる三の精神」に於ては古代文學の精神としてまこと、ものあはれ、幽玄を擧げその意義並に展開を辿り、その他古事記の統一性としての國家的精神を明かにし、長歌・旋頭歌の形態の本質を定め、又堤中納言物語や狭衣物語を考察し藤原定家を中心として古代和歌の内容や形態を觀察する等、從來比較的閑却せられた古代國文學上の問題を中心として新解釋を與へんと試みた。

更に古代文學の研究史上に於ける特殊の問題を捉へ考證を試みた。契沖と春滿との學說上の影響關係のあることを斷定し、從來春滿の著書と信ぜられてゐた萬葉童蒙抄は實は春滿の弟信名の著なることを明かにし、或は契沖の弟子野田忠肅の歿年を考證し、高野山に藏する折負輯によつて微雲軒の傳を明かにし、刈谷文庫を採つて村上忠順の業績を明かにしたるなど、學界に未知の新事實を提供したものが尠くないのである。

實に本書はこれ等の諸問題に就き著者が深い造詣を以て縦横に論議し、その真相を闡明して前人未言の新説を唱出したのは國文學界に於ける一大收穫である。











東京帝國大學文學部講師 山中謙二先生著

# 西洋史概説

八版 定價金 四圓  
送料 金拾四錢

一體史學究極の目的は個々の史實を研究して其真相を究めるといふよりも、更に進んでその個々の史實が人類生活に如何なる意義を有し、それが如何に發展して現代生活を馴致したかを明かにする所に存する。本書は實に我が史學界に重きをなす著者が、この史學本來の立場に立つて西洋史を概観し一系の下に組織立てた新しい試みて、其の透徹せる歴史觀と豊富なる思想的素養と最も新しい研究法とによつてよく其真相を究めてゐる。

一本書は西洋史の知識に正しい系統を與へ人類生活に意義あらしめることを主眼とした。即ち古代美術、文藝復興、産業革命、世界大戦、古代希臘の諸聖、シーザー、那翁、沙翁、マルクス其他凡ての史實を捉へて史上に如何なる意義を有し如何なる役割を果し又將來に如何なる影響を及ぼすかを説いて之を嚴正に批判した。而して著者の犀利なる史眼は此等史實の裡に潜む思想生活の真相を捉へ其變遷推移の狀を大觀し人類生活發展の實相を描出した。

一更に過去の史實によつて現代の由つて來つた趣を明確にした。即ち古代に就ては文化の變遷推移の跡を辿り、近世に就ては政治社會の方面に重きを置き、かくて現代文明發達の經路を明かにし、以て將來の向ふべき所に資せんとした。

誠に本書は人類經驗の總記録であり、卓越せる文化史であつて特に現代生活に密接なる交渉を有する點に於て萬人必讀の良著である。實に本書によつて歴史家は其研究の新生面を發見し、一般讀書家は盡きざる興味を覺えながら現代世界の大勢を知ると共に現代社會生活に對する正しい理解を得ることが出来る。

文學博士 藤村 著作

抄本 日本永代藏 定價 八十錢

抄本 胸算用 定價 七十錢

奥の細道 定價 三十錢



